HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教育と保育を通じた日本人とブラジル人の関係
Author(s)	新藤, 慶; 菅原, 健太; 品川, ひろみ 他
Description	第2部 在日ブラジル人と日本人の関係. 第8章
Relation	日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住. 小内透編著. (外国人集住地域の社会学的総合研究 ; その8)
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 28, 177-214
Issue Date	2009-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38202
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_p177-214.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第８章　教育と保育を通じた日本人とブラジル人の関係

第１節　公立小中学校における日本人と外国人

第１項　はじめに

1990年の入管法改正以来、日本に暮らすブラジル人は増加の一途をたどり、その数は30万人を超えている。それに伴い、重工業都市を中心に、ブラジル人の集住地域が各地につくられている。ただし、これらの集住地域では、ブラジル人とホスト住民の「セグリゲート化」が進展しており、生活世界での共生の実現が課題となっている（小内・酒井編 2001）。

そのようななか、ブラジル人と日本人の生活世界における数少ない結節点が、公立小中学校である。ここでは、ブラジル人・日本人双方の子どもたちが生活を共にしており、将来における共生の担い手育成の場となっている。また、子どもの交流を通じた親同士の交流の進展も期待できる。つまり、公立小中学校は、ブラジル人と日本人の共生の実現にとって、大きな可能性を持つ（小内 2003a）。しかし、このような観点から、公立小中学校のブラジル人の子どもと日本人の子どもの両者の関係を扱った研究は少ない。

ただし、ブラジル人が学ぶ公立学校を対象とした研究からは、公立学校におけるブラジル人の子どもと日本人の子どもの交流を促す要因を見出すことができる。一つは、「人的要因」である。竹ノ下（2005）は、少人数での学習サポートや、年齢にこだわらない適切な学習レベルの学年への受け入れなど、外国人児童・生徒に手厚い働きかけを行っていると、かれらの学習アスピレーションが高まると指摘している。逆に清水（2006）は、ニューカマーの子どもの多くが言語や身体的特徴を理由に「いじめ」を受けたことを指摘している。これは、日本人児童・生徒との交流の妨げになると考えられる。

それに対し、もう一つの要因は「文化的要因」である。新藤（2008）は、勉強に積極的に取り組み、生徒会や部活動の役員を経験するなど、公立学校の学校文化への適応度が高いブラジル人の子どもは日本人の友人数が多いなど、交流が活発化する傾向を指摘している。一方、児島（2006）は、公立学校におけるポルトガル語やブラジル文化の軽視に対する問題意識が、公立学校への「抵抗」の源泉となっていることを明らかにしている。このように、公立学校におけるブラジル人と日本人の交流を考える際には、「人的要因」と「文化的要因」が大きな関わりを持つことがうかがえる。

これらをふまえ、本節では、公立小中学校に通うブラジル人と日本人の子どもとその親を対象に分析を行う。まず子ども分析では、「公立学校がブラジル人と日本人の結節点であるのか」を検討する。その上で、「将来における共生の担い手が育成されるのか」を確認してみたい。

次に、保護者分析では、保護者にとっても「公立学校がブラジル人と日本人の結節点であるのか」を検討する。それをふまえて、「子どもの交流を通じた親同士の交流の進展があるのか」を調べていくことにしたい。その際、上記の「人的要因」「文化的要因」に注目しながら、これらの子ども・保護者の共生・交流を分析していく。

なお、これまでのブラジル人の子どもの教育をめぐる実証研究は、ある特定の事例に基づくことが多い。そこで、本節では、ほぼ同様の設計で行われた３地域での調査をもとに、地域間比較を行うことで、知見の豊富化を図りたい。

第２項　調査と対象地の概要

本節で使用するデータは、表8-1に掲げた諸調査によって得られたものである。群馬県大泉町、愛知県豊橋市、静岡県浜松市の３地域で、1998年から2007年にかけて実施したものである。なお、ブラジル人以外の外国人への調査も行っているが、ここでの外国人の分析は、ブラジル人だけを取り上げて行う。

表8-1　調査の概要

調査地 調査対象校 調査年月	ブラジル人親子データ	日本人親子データ
群馬県大泉町 公立小中学校６校 1998年９～10月	調査対象59組 有効回収41組(69. 5%)	調査対象884組 有効回収532組(60. 2%)
愛知県豊橋市 公立小中学校８校 2006年９～10月	調査対象175組 有効回収103組(58. 9%) (うちペルー人３組)	調査対象2292組 有効回収1776組(77. 5%)
静岡県浜松市 公立小中学校７校 2007年９～10月	調査対象180組 有効回収123組(68. 3%) (うちペルー、中国、フィリピンなどブラジル人以外が16組)	調査対象1523組 有効回収1381組(90. 7%)

調査対象地の特徴を、簡単に確認しておく。外国人登録者をみてみると（表8-2)、大泉は外国人割合が16.3%で、全国の自治体でもっとも高い。それに対し、浜松は33,326人と、全国でもっとも外国人登録者が多い。豊橋も２万人を超えており、相当な数に上っている。特に豊橋では、公営団地での集住が目立つと指摘されている。

国籍の内訳をみると、いずれもブラジルが６割前後を占め、もっとも多くなっている。これらの諸地域は、基本的にブラジル人集住地としての性格を持っている。

表8-2　外国人登録者数の状況（2008年４月１日現在）

都市名	面積（km²）	総人口 （人）	外国人 登録者数 （人）	外国人 割合 （%）	登録者 国籍１位 （人）	同２位（人）	同３位（人）
群馬県 大泉町	17. 93	42, 113	6, 878	16. 3	ブラジル 4, 931	ペルー 839	中国 405
愛知県 豊橋市	261. 35	383, 945	20, 428	5. 3	ブラジル 12, 885	韓国・朝鮮 1, 906	フィリピン 1, 758
静岡県 浜松市	1, 511. 17	823, 628	33, 326	4. 0	ブラジル 19, 461	中国 3, 091	フィリピン 3, 034

注）外国人集住都市会議ウェブ・ページ（http://homepage2.nifty.com/shujutoshi/shiryou/shiryou/20080401kaiintoshidata.pdf，2008. 9. 17）より引用。

ただし、調査対象校の外国人児童生徒の割合をみてみると（表8-3)、大泉と豊橋はともに7.5%前後である。それに対し、浜松は12.1%と他に比べてかなり多くなっている。浜松全体では外国人住民の割合は4.0%であるから、今回の対象校、およびその校区に、外国人がかなり集まっていると考えられる。

表8-3　調査対象校別外国人児童生徒数・比率

大泉 1998		OA小	OB小	OC小	OD小	OE中	OF中	OG中		合計
	人数	25	102	82	30	19	35	19		312
	比率	4.7	15.2	9.2	5.1	3.0	9.4	4.5		7.6
豊橋 2006		TA小	TB小	TC小	TD小	TE小	TF中	TG中	TH中	合計
	人数	107	52	45	74	85	27	27	33	450
	比率	10.5	10.6	4.9	9.7	14.5	5.8	3.4	5.8	7.4
浜松 2007		HA小	HB小	HC小	HD小	HE中	HF中	HG中		合計
	人数	96	67	77	99	30	49	29		447
	比率	23.1	21.5	9.2	11.6	9.5	8.2	8.1		12.1

注）各市町教育委員会資料より。

第３項　ブラジル人児童・生徒への教育支援の取り組み

このように、今回対象とした公立学校は、学校ごとの差異はあるが、おおむね10%前後の外国人児童・生徒を抱えている。このような現状に対処するため、これらの地域や学校では、外国人児童・生徒の教育を支える取り組みが行われている。

これまで公立学校では、外国人児童・生徒への教育支援といえば、取り出し授業による日本語の補習が中心であった。そこでは、日本の学校教育に適応することが目的とされ、母語・母文化への配慮は不十分であった。また、肝心の日本語指導にしても、次々とやってくる外国人児童・生徒たちの前では日本語教室のキャパシティも限界となり、十分な日本語能力を獲得しないままに、ところてん式に原学級へと押し戻されることも多かった（小内 2003b:222)。このように、日本語・日本文化を前提とした形での外国人児童・生徒への対応については、柔軟性を欠いた「一斉共同体主義」として批判の対象となっていた（恒吉 1996; 太田 2000)。

しかし、近年、公立学校での外国人児童・生徒への対応は大きく変わっている。浜松市のある小学校では、国語と算数の授業時間を２学年ずつすべてのクラスで同じ時間割にそろえ、日本人・外国人を問わずに習熟度別クラス編成を行っている。これにより、エスニシティの違いを問わず、「学力保障」という点から教育支援が行われており、結果として外国人児童・生徒への細やかな対応につながっている。また、同じく浜松市では、当人が希望すれば、その日本語能力に応じて１つ下の学年に編入することも認められている（小内 2008:9)。

さらに大泉町に隣接する太田市では、学習内容をより円滑に理解できるように、ポルトガル語と日本語を使うことができるバイリンガル教員を配置している。この制度は、ブラジルの教員免許などを持つ日本人や日本の教員免許を持つ日系人などをバイリンガル教員として採用し、市内の公立学校でブラジル人児童・生徒の指導にあたらせるというものである。2004年に導入され、2008年には８人がバイリンガル教員として採用されている。生活指導、学習指導の両面にわたって指導を行っており、成果も上がっている。特に、外国人生徒の高校進学率は、2002年度の５割から、2006年度には87%まで上昇している[1)]。

加えて浜松市では、これまではほとんど例がなかった母語や母文化を教える教室が開設された。これは「母国語教室（まつっこ)」と呼ばれるもので、毎週土曜日の午前にポルトガル語教室、午後にブラジル文化教室がそれぞれ２時間程度開設されている。また、ヴェトナム版も、言語と文化の教室をあわせて３時間であるが、同じように毎週土曜日の午前に開かれている[2)]。

このように、行政や学校など制度レベルの取り組みが進んでいるが、これを下支えするのが、現場で指導に当たる教師たちの存在である。浜松市のある中学校で外国人生徒の指導を担当するある

教師は、元々静岡市で勤務していたが、外国人教育に関心を持ち、自主的に研修を受けるなどした上で浜松市への異動希望を出し、単身赴任で外国人教育にあたっているという[3)]。また、豊橋市では、小学校１年生から中学校３年生のレベルまで、ポルトガル語の説明を加えた学習プリントを数十種類作成した教師の話が聞かれた。この教師は、現在は定年を迎えているが、作成されたプリントは今でも市内の小中学校で使われているという。また、この教師を始め、豊橋市では10年以上にわたって外国人教育に携わる教師が多く、ポルトガル語が使えるようになるケースも少なくないとのことであった[4)]。

従来、日本語教室担当といえば、新任であったり、通常の学級運営に問題があったりするなど、日本人児童・生徒教育に支障が少ない教師があてられる傾向があった（佐久間 2006: 57)。しかし、上述のように、最近では、公立学校での外国人児童・生徒への教育支援は重要な課題として位置づけられ、専門的力量をもって外国人教育にあたる教師の増加といったソフト面と、それを支える行政や学校の制度的対応といったハード面の両面で格段に充実してきているといえるだろう。

第４項　ブラジル人の子どもから見た関係

⑴　ブラジル人の子どもの交流実態と交流希望

このように教育支援が拡充されるなか、公立学校に通うブラジル人の子どもたちは、日本人との関わりをいかなる形で有しているのだろうか。また、そもそもブラジル人の子どもたちにとって、公立学校は日本人との結節点となっているのだろうか。この点を探るために、日本人の友人数の有無を見ると、地域別では、豊橋と浜松では95%前後が日本人の友人を持つのに対し、大泉では84.2%とやや少ない。ただし、全体では９割以上が友人を持つ。

その友人たちと知り合った場所は、９割前後が「同じクラス」である。「その他の学校内」や「部活」も３割前後の者が挙げている。大泉ではこれらの割合がやや低いが、学校関係の比重は大きい。このことから、学校は日本人の友人を獲得するためのもっとも重要な場であり、その意味で日本人との重要な結節点となっているといえるだろう。

このように公立学校を舞台として日本人と接点を持つブラジル人の子どもたちは、日本人の子どもたちとの間に、どのような交流を持ち、今後どのような交流を希望しているのか。そこで、ここでは、ブラジル人と日本人との間で、言語、文化、ルールなどをそれぞれ教えたり、教わったりするかを尋ねることで、交流実態や交流希望を把握することにした[5)]。その結果、現在の交流実態では、「（教わる・教えるの）両方」42.8%、「教わるのみ」24.0%、「未経験」21.2%、「教えるのみ」12.0%となっており、お互いに教え合う双方向的な交流を持つ者が半数弱に上ることがわかった。一方、今後の交流希望は、「両方」31.8%、「意志不明」24.4%、「教わるのみ」25.1%、「教えるのみ」13.1%、「つきあいたくない」5.7%であった。交流実態に比べ、交流希望はやや消極的になっているが、「つきあいたくない」という明確な意志を示したものはごくわずかであり、多くは今後も交流を継続したいと考えている。このように、実態としては８割弱が何らかの交流を行っており、７割程度が今後何らかの交流を希望していることがわかる。

それでは、このような交流実態や交流希望は、いかなる要因によって規定されるのだろうか。第１に、「好きな授業」が挙げられる。「好きな授業」がある者自体は、全体で47.4%と半分弱になっている。ここでは、地域差は見られない。この「好きな授業」の有無と交流実態との関連を見ると、「好きな授業」があるほど交流実態が「両方」となるケースが多く（「好きな授業あり」で48.1%、

「なし」では37.8%)、交流が活発になっていることがわかる（p<.01)。また、交流希望も、「好きな授業」があるほど強まっている（「両方」の交流希望は、「好きな授業あり」で41.5%、「なし」では23.0%、p<.05)。ここから、「好きな授業」があり、意欲的に学習に取り組める充実した支援が受けられている者ほど、交流が活発になっていることがわかる。

一方、同じ「人的要因」でも「いじめ」[6] のようなトラブルについてみると、「いじめ」経験者そのものは７%程度にとどまった。地域ごとにみると大泉で約17%とやや多くなる一方、豊橋・浜松では５%前後である（p<.05)。この「いじめ」経験と交流実態・交流希望との関連を見ると、交流実態には関連が見られなかった。その反面、今後の交流希望では、「いじめ」経験者は「つきあいたくない」（「いじめられた経験あり」では20.0%、「なし」では4.6%）や「教わるのみ」（「いじめられた経験あり」では35.0%、「なし」では24.3%）という交流拒否や受動的交流が多くなっていた(p<.05)。地域ごとにみると、大泉でのみこの傾向が確認できた（p<.05)。しかし、他の地域では、そもそも確認できた「いじめ」経験者が少なく、交流実態・交流希望との間には関連が見られなかった。このように、「人的要因」では、「いじめ」といったネガティブな部分よりも、「好きな授業」が持てるくらいの学習サポートが受けられているというポジティブな側面がより強い影響を持ち、交流実態も交流希望も積極的になっていることがわかる。

一方、第２に挙げられるのは役員経験である。全体の状況を見ると、役員経験を持つ者は約３割である。ただし、地域ごとの差が存在し、大泉（4.9%）＜豊橋（21.0%）＜浜松（47.2%）となっている（p<.001)。

この役員経験と交流実態の関連を見ると、役員経験がある場合は「両方」の交流を行っているのが55.3%であるのに対し、役員経験がない場合は「両方」の交流経験者は37.4%にとどまっており、役員経験者の方が活発となっている（p<.05)。ただし、地域差は生じておらず、いずれも同様に役員経験者は積極的に交流している。だが、交流希望では、役員経験との関連は見られない。役員経験者が約半数である浜松では、むしろ役員経験者の交流希望が低くなっている（p<.05)。これは、すでに交流が十分であるため、これ以上の交流は望んでいないことを示しているのではないだろうか。このように、役員を経験するというほど公立学校の学校文化に親しんでいる場合は、一定程度、交流が積極的となる様子が確認できる。

一方、日本の学校文化にはブラジル人の子どもへの配慮に欠けるところがまだまだ存在するが、学校文化への「抵抗」は、交流を妨げることにつながっていなかった。「ポルトガル語使用は当然」を肯定する者は、全体で52.5%とほぼ半数である。ただし、交流実態や交流希望との関係をみると、有意差は見られなかった。つまり、公立学校でのポルトガル語の位置づけに問題を感じることと、日本人の交流とは別の次元の問題だということである。

⑵　将来の共生の担い手形成に向けて

以上、ブラジル人の子どもの側から、交流実態と交流希望を検討してきた。その結果、以下の諸点が明らかになった。第１に、「好きな授業」の保持につながる「学習サポート」の存在や、役員経験などの学校文化への適応は、交流に大きな関わりを持っていた。いずれも、日本人との交流を促す方向に働いていた。

一方第２に、交流を妨げる要因は明確とならなかった。「いじめ」については、やや交流希望を消極的なものとしていたが、そもそも明確に「いじめ」経験を持つという者自体が少なかった。ま

た、ポルトガル語の軽視など公立学校の学校文化への抵抗感も、交流とは関連を持たなかった。このことは、公立学校文化への抵抗は、日本人の子どもとの交流と矛盾しないことを意味している。

ただし第３に、地域差が無視できない部分もあった。「いじめ」は大泉で多く、ポルトガル語の軽視への問題意識は大泉で高く、役員経験は大泉で低くなっていた。このことは、大泉という地域の特性というより、調査時期の問題と捉える方が適切だと考えられる。つまり、1998年の段階と、2006～2007年の段階の違いだと理解できる。前項でも確認したように、この８～９年の間に公立学校での外国人に対する教育支援はかなり充実したものとなり、公立学校はブラジル人の子どもにとって少しずつ過ごしやすくなってきたことがうかがえる。そして、同時にブラジル人の子どもも学校への適応を強めている。このことは、交流を妨げる要因が弱くなり、交流を促す要因が強まっていることをも示している。このことから、外国人の子どもへの学習サポートをさらに進め、公立学校の文化に親しんでいくことができれば、公立学校は、ブラジル人と日本人の共生の担い手を形成する重要な基盤となることが期待できるといえるだろう。

第５項　ブラジル人保護者の交流実態と交流意識

⑴　交流の実態

それでは、以上見てきたような子ども同士の交流は、親の交流に影響を与えるのだろうか。そこで、次に、ブラジル人保護者の交流実態と交流意識を検討する。

まず、日本人との交流の実態をみると、「職場に日本人がいる」は約９割（90.0%）、「家に招待した」「一緒にレジャーを楽しんだ」がそれぞれ６割前後である。「日本語を習っている」は２割程度である。これらの項目では、地域差はほとんど見られない。しかし、「一緒にボランティアをした」はやや差があり（$p<.01$）、大泉・豊橋が半分弱であるのに対し、浜松では約６割である。総じて、浜松では交流が積極的になっている。

一方、子どもを通じた交流を、「子ども会」「スポーツ少年団」「PTA」について見てみると、いずれも参加率は５～６割となっている。子ども会については、豊橋や浜松では７割前後の参加率となっているのに対し、大泉では38.9%とやや低くなっている（$p<.05$）。それに対し、それぞれの場面で日本人の親と話す経験は３～６割とややばらつきがある。日本人の親と話す経験については地域差が見られ、大泉よりも豊橋・浜松で経験率が高い。特に、豊橋の経験の高さが目立つ（「子ども会」で話すのが72.7%、「スポーツ少年団」で話すのが75.0%、「PTA」で話すのが62.8%）。これらのことから、日本人との接点は多様であるが、子どもを通じた機会が重要な位置を占めることがわかる。

⑵　交流に関する意識

このように子どもを介しながら日本人との接点を保持している親たちは、どのような交流希望を持っているのだろうか。親自身の交流希望を尋ねる項目を用意していなかったので、子どもに対する交流希望を確認しながら、親の状況を推測することにする。

子どもに対しては、いずれの地域でも約９割が日本人との交流を望んでいる。ただし、この子どもの交流については、複雑な意識を抱えている。そこで、交流に関する意識を尋ねた項目を因子分析にかけたところ、「母文化志向因子」「交流懐疑因子」「交流志向因子」が析出された（表8-4）。

表8-4　ブラジル人保護者が抱える子どもの交流に関する意識の因子分析結果

	母文化志向因子	交流懐疑因子	交流希望因子
ポルトガル語を使うのは当然	0. 672	−0. 160	−0. 083
ポルトガル語教育をすべき	0. 498	−0. 092	−0. 063
自分の子をブラジル人だと感じる	0. 479	0. 401	0. 171
日本人との共学は役に立つのか	−0. 195	0. 872	−0. 051
国際的な視野が持てる	0. 176	0. 057	0. 455
つきあってほしくない	0. 047	0. 219	−0. 452
日本人と交流してほしい	−0. 199	0. 002	0. 416
ブラジル人だけの学校に通うべき	0. 184	0. 101	−0. 334
ブラジル人も日本語を使うべき	−0. 055	0. 061	0. 312

注）1. 因子抽出法：最尤法
2. 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

そこで、それぞれの因子得点の平均を求め、地域差を検討してみると（表8-5)、「母文化志向因子」はほとんど地域差がなかった。「交流希望因子」は大泉＜浜松＜豊橋の順に強くなるが、地域差はそれほど大きくない。それに対し、「交流懐疑因子」は大泉＞豊橋＞浜松の順に弱くなり、調査実施時期の順と重なっている。地域差もかなり大きく表れている。そこで、子ども同士の交流の成果について懐疑的な姿勢を示す「交流懐疑因子」を用い、ブラジル人保護者の交流意識を形成する要因を探ることにしたい。

表8-5　地域捌にみた各因子得点の平均値

地域		母文化志向因子	交流懐疑因子	交流希望因子
大泉	平均値	0. 014	0. 304	−0. 117
	度数	47	47	47
	標準偏差	0. 924	1. 068	0. 873
豊橋	平均値	−0. 024	−0. 073	0. 087
	度数	82	82	82
	標準偏差	0. 790	0. 766	0. 624
浜松	平均値	0. 017	−0. 102	−0. 020
	度数	81	81	81
	標準偏差	0. 760	0. 786	0. 741

この「交流懐疑因子」の規定要因を探るため、これを従属変数とする重回帰分析を行った（表8-6)。そこから、大きくわけると３つの要因が見出された。

表8-6　「交流懐疑因子」の重回帰分析結果

	標準化係数 ベータ	有意確率	調整済み R2乗
			0. 128
（定数）		***	
学校の出来事を聞く	0. 120	*	
教育期待	−0. 199	***	
テストの結果をみる	−0. 170	**	
同居家族数	−0. 158	**	
PTAでの日本人親とのつきあい（つきあいダミー）	−0. 152	**	
将来展望（残留希望ダミー）	−0. 139	*	
大泉・豊橋・浜松居住歴	−0. 093	+	

従属変数：交流懐疑因子（ブラジル人のみ）

+ p<. 1
* p<. 05
** p<. 01
*** p<. 001

第１に、日本社会への根づきである。「同居家族数」「将来展望（残留希望）」「居住歴」などで負の数値を示しており、これらの要因が高まるほど交流が促進されることがわかる。つまり、ブラジル人の親たちは家族とともに長く現住地に暮らし、将来も日本にとどまろうとの意識を強めることによって、子どもの交流を積極的に評価するようになっている。

第２に、教育への関心である。「教育期待」「テストの結果をみる」は「交流懐疑因子」を弱めており、交流を進めていると捉えられる。つまり、教育への関心が高いほど、子どもの交流を積極的に評価しているということである。一方、子どもから「学校の出来事を聞く」は交流への懐疑を強めている。これは、子どもから学校でのマイナスの情報が入ることが原因として考えられる。

第３に、日本人とのつきあいである。ここでは「PTAでの日本人親とのつきあい」が負の効果を持っていた。つまり、日本人との直接的なつながりが交流を促している。特に、日本人との関わり方では、親自身の職場でのつきあいや地域での触れ合いなどもありうるなかで、PTAという学校を媒介とするものが影響力を持っていることは注目に値する。

ただし、地域ごとに見ると、少し違った様相が浮かび上がる。大泉では、子どもの「子ども会への参加」や、「居住歴」「将来展望」など日本社会への根づきが交流に結び付いている（表8-7）。しかし、「教育期待」や「テストの結果を見る」など教育への関心は影響をもたらしていない。

それに対し、豊橋や浜松では、日本社会への根づきよりも、むしろ教育への関心や日本人の親とのつきあいが大きな影響を持つことになっている（表8-8・8-9）。このことは、滞日期間の長期化に伴い、日本社会への根づきの程度には差がなくなってきたこと、そのような状況のなかでは、教育への関心といった文化的要因や日本人の親とのつきあいといった人的要因が交流意識を規定する状況へと変化してきていること、を示していると考えられる。

表8-7　「交流懐疑因子」の重回帰分析結果（大泉）

	標準化係数 ベータ	有意確率	調整済み R2乗
			0. 189
（定数）		***	
子ども会への参加（参加ダミー）	-0. 301	**	
大泉・豊橋・浜松居住歴	-0. 229	*	
将来展望（再割り当て・残留希望ダミー）	-0. 205	*	

従属変数：交流懐疑因子（ブラジル人のみ）

* p<. 05
** p<. 01
*** p<. 001

表8-8　「交流懐疑因子」の重回帰分析結果（豊橋）

	標準化係数 ベータ	有意確率	調整済み R2乗
			0. 299
（定数）		***	
日本人との関わり・日本語学習	0. 202	*	
教育期待	-0. 359	***	
同居家族数	-0. 285	***	
スポーツ少年団での日本人親とのつきあい（つきあいダミー）	-0. 256	**	
PTAでの日本人親とのつきあい（つきあいダミー）	-0. 181	*	

従属変数：交流懐疑因子（ブラジル人のみ）

* p<. 05
** p<. 01
*** p<. 001

表8-9　「交流懐疑因子」の重回帰分析結果（浜松）

	標準化係数ベータ	有意確率	調整済みR2乗
			0. 177
（定数）			
PTAへの参加（参加ダミー）	0. 227	*	
スポーツ少年団への参加（参加ダミー）	0. 211	*	
子ども会での日本人親とのつきあい（つきあいダミー）	−0. 287	**	
教育期待	−0. 245	**	
テストの結果をみる	−0. 198	*	

従属変数：交流懐疑因子（ブラジル人のみ）

* p<. 05

** p<. 01

⑶　公立学校を舞台とした交流の「良循環」

以上の分析をふまえると、ブラジル人保護者の交流実態や交流意識については、次の３点が指摘できる。

第１に、何らかの交流を日本人と持っている親は６割程度にのぼっていた。そのなかでも、PTAやスポーツ少年団、子ども会といった、子どもに関わる場を介して、日本人の親との接点を持つケースも多く見られた。この点で、子どもや公立学校という存在が、ブラジル人保護者と日本人との交流の結節点となっている状況が確認できる。

また第２に、子どもに対しては、今後も継続して日本人と交流を持つことを望んでいる。少なくとも子どもについては、日本人と関わることが望ましいことだと受け止めている様子が看取できる。

さらに第３に、子どもの交流に関する意識を規定する要因には地域差が見られた。具体的には、大泉では居住歴などの日本社会への根づきの程度が大きな影響をもたらしていたが、豊橋や浜松では、教育への関心や日本人の親とのつきあいといった文化的・人的要因が大きな意味を持っていた。これは、大泉調査から豊橋・浜松調査にいたる８～９年の間に、ブラジル人保護者の交流に関する意識を規定する要因が変化してきたことを示す。豊橋・浜松で強く見られた要因のうち、教育への関心は、「子どもにとって交流が望ましいから」という意識を表しているのだろう。しかし、それだけでなく、日本人とのつきあいといった要因が大きく影響しているということは、日本人とのつきあいを持つブラジル人保護者自身が、日本人と交流していることを肯定的に受け止め、それを子どもにも勧めているものと捉えられる。つまり、単純に「子どものため」を考えて交流を勧めているだけでなく、「自分でも交流していることがよいから子どもにも勧める」という図式が成り立っているのである。

このように、ブラジル人保護者の交流をめぐる分析からは、公立学校が舞台となって保護者自身の交流が活発になるとともに、それが子どものさらなる交流を促進するように働いているといった「良循環」が浮かび上がってきた。その意味では、ブラジル人保護者にとっても、公立学校は交流の基盤として非常に重要な役割を果たしているといえるだろう。

第６項　日本人保護者と児童の意識・行動

⑴　はじめに

ここではブラジル人と日本人との関係を、日本人の意識という点から比較分析をしていく。比較対象は、群馬県大泉町、愛知県豊橋市、静岡県浜松市、この三地点である。これらの地域では、その関係にはどのような特徴があるのか、そして、地域間ではどのような相違点があるのか、といった点について分析を行う。

分析は「日本人保護者」と「日本人児童」の二つに大きく分かれる。ブラジル人と日本人との関係における地域差については、これまでほとんど注目されることのなかったものであるため、これら三地域の比較には、一定の意義があると考えられる。

ここからは、まず保護者についての地域間比較、次に児童についての地域間比較という順に進んでいきたい。

⑵　保護者についての分析

はじめに、各地域において、外国人との交流がどのような特徴を示しているのかについて見てみよう。使用する設問は「あなたは、日常、次のような外国人とのおつきあいや外国との関わりがありますか」というものであり、それぞれについて「はい／いいえ」の回答がある。

結果については、同じ職場での出会い（豊橋：10.1%、浜松：15.8%、大泉14.6%）や、家に招く（豊橋：12.1%、浜松：15.3%、大泉14.0%）ということに関しては、いずれも浜松と大泉に比べ、豊橋は相対的に肯定回答率が低い（いずれも$p<0.01$）という結果になっている[7)]。浜松、大泉に比べ、豊橋はあまり交流が行われていないようだ。

では、外国人（児童）に対する親の意識はどのようになっているのだろうか。使用する設問は「外国人児童に関する以下の意見についてどう思いますか」というものであり、回答は「ア．まったくその通りだ〜エ．まったくそう思わない」までの四点尺度であり、以下の結果はそのうちアとイをまとめて「肯定回答」としたものである。

結果を見ると、浜松では「外国人児童と深く付き合って欲しくない」への肯定回答率が相対的に高く（15.2%）、また「勉強が遅れる」（17.1%）といった外国人（児童）の存在に対する否定的な評価が現れている。ただし、そこでは同時に「国際的な視野が広がる」といった肯定的な評価においてもまた相対的に高い数値（64.7%）となっていることには注意すべきだろう。つまり、単純に外国人（児童）に対して否定的な地域として浜松を捉えることが難しいということだ。豊橋もまた、浜松と似たような特徴を示している。

一方、大泉は、「外国人児童と深く付き合って欲しくない」への肯定回答率が相対的に低い（9.0%）。とは言え、積極的に交流することへの志向が有意に高い結果とはなっていないことを考えると、大泉は逆に、単純に肯定的な地域として捉えることが難しいということになるだろう。

ところで、最初に見た「外国人との交流経験」と合わせて考えると、浜松ではその頻度が相対的に高かったにもかかわらず、意識においては肯定的にはなっていないことになる。逆に、同様に頻度が相対的に高かった大泉では、やや肯定的な意識となっている。これはどういうことだろうか。

⑶　寛容性・拒否性についての分析

そこで、ここからは各地域において「寛容性」は「接触経験」とどのような関係になっているのかを探ってみることとしたい。

まず、先ほど使用した外国人（児童）に対する意識についての設問を使用し、因子分析にかけた。結果、「寛容因子」「拒否因子」「言語因子」という三つの因子が抽出された。「寛容因子」は、外国人（児童）との積極的な交流への肯定や、「国際的な視野が広がる」で数値が高くなっている。逆に「拒否因子」では、「自分たちが日本人だと強く感じる」「勉強が遅れる」、などに加え「外国人児童と深く付き合って欲しくない」でも低くない数値が現れている。

表8-10　外国人（児童）に対する意識の因子分析

	因子 寛容因子	拒否因子	言語因子
外国人児童と積極的に交流してほしい	0.811	0.087	0.039
国際的な視野が広がる	0.689	0.213	0.099
外国人児童と深くつきあってほしくない	-0.537	0.287	0.047
外国人だけの学校へ通ったほうがいい	-0.414	0.367	0.086
自分達が日本人だと強く感じる	0.137	0.594	0.032
勉強が遅れる	-0.073	0.523	-0.001
日本語を使うべき	0.149	0.499	-0.202
母国語教育をすべき	0.027	-0.031	0.668
母国語を使うのは当然	0.173	-0.108	0.354
回転後の負荷量平方和(a)	2.123	1.717	0.699

因子抽出法: 最尤法　回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子間相関行列でも、寛容因子と拒否因子は相関係数が-0.594となっており、両者は相反する意味合いを持った因子であることが確認される。各地域における平均値は以下のようになった。

図8-1　因子得点平均値グラフ

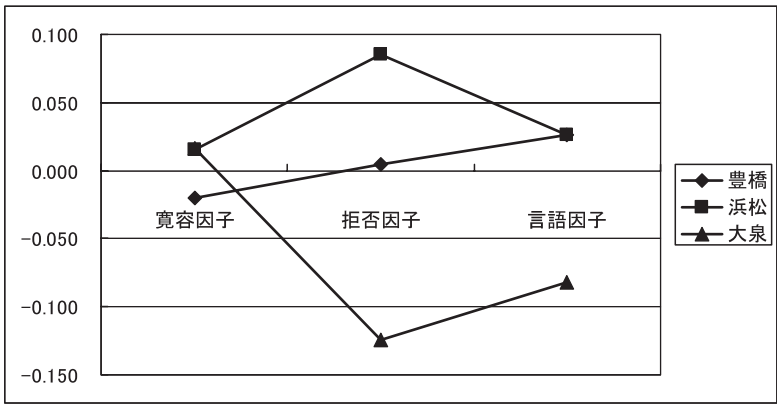


表8-11　因子得点平均値

	寛容因子	拒否因子	言語因子
豊橋	-0.020	0.005	0.026
浜松	0.015	0.085	0.026
大泉	0.016	-0.125	-0.082

先ほど見たように、浜松では寛容と拒否が共存している。ただ、因子で見た場合には、寛容性が低いのは浜松ではなく豊橋となっているようだ。拒否因子については、大泉では唯一平均値が負の数値となっている。

これを見る限り、三地域の特徴としては、寛容性が低いとはいえ豊橋を中央値として、寛容性と拒否性が反比例している大泉と、両者が共存している浜松という特徴が浮かび上がってくる。

⑷　寛容性を支えるもの―全体

では、この寛容性とは、どのような意識・経験によって支えられたものなのだろうか。この寛容性を支えるものについて、属性や思想など、設問全体から幅広く項目を取り出し、重回帰分析にかけた結果が以下である。なお「文化厳格個数」とは、ピアス・掃除の習慣（のなさ）・不登校・給食（を日本人と違うものにする）の四つについて、「日本では認められない」と回答した個数である。

表8-12　寛容性重回帰・全体

	標準化係数ベータ	有意確率	調整済みR2乗
（定数）	-0.974	0.000	0.177
子どもに外国人の友達がいる	0.172	**	
ピアス認めるダミー	0.168	**	
外国人と一緒にレジャーを楽しんだことがある	0.069	**	
外国人を家に招いたことがある	0.063	**	
親学歴	0.054	**	
ＰＴＡでの親との交流	0.051	**	
子どもに望む学歴	0.049	**	
子供の友達の親との交流	0.049	**	
成功：個人の努力	0.042	**	
外国人と同じ職場で働いたことがある	0.041	**	
スポーツ少年団での親との交流	0.035	*	
外国語を習っている	0.031	*	
家族人数	0.030	*	
子ども会参加	0.029	*	
成功：有力者とのつながり	-0.030	*	
成功：家柄・親の地位	-0.041	**	
塾の重要性	-0.059	**	
成功：学歴	-0.079	**	
文化厳格個数	-0.099	**	
不登校認めるダミー	-0.160	**	

従属変数：寛容因子

**：１％水準で有意

*：５％水準で有意

最も強い正の影響力をもっているのは、「子どもに外国人の友達がいる」となっている。外国人との直接的な交流が３番目以降であることを考えると、少なくとも保護者にとって、外国人(児童)に対する寛容性というものは、当人の交流それ自体よりも、子どもが彼らを受容していることを媒介として支えられている。

また、影響力はそれほど高くはなっていないが、「子どもに望む学歴」「保護者の学歴」が共に正の影響力を示している一方、「成功に必要なもの」が学歴であるとする意識・思想が、負の影響力をもっているという点も見逃せないだろう。保護者が学歴の重要性を意識する時、そこでは寛容性が押し下げられる。しかし、子どもにより高い学歴を望む時、寛容性は押し上げられる。これはどういうことだろうか。

一つ考えられるのは、負の影響力をもつ項目に「塾の重要性」や「不登校認めるダミー」が入っていることから推測すると、ここでいう「学歴」は「学力」や学校文化への適合性と同じ意味合いをもったものであり、一方、正の影響力をもつ項目に、成功に必要なものとして「個人の努力」が入っていることを考えると、そこでの「学歴」は「学力」だけには還元されない、何らかの成果という意味合いをもったものなのではないか、ということだ。つまり、学校という場における外国人（児童）についての意識は、単純な「(現在の）学力」を重視する場合には、外国人（児童）という存在が学習を阻害する要因としてはたらくと考えられ、逆に「(将来的な）成果」を重視する場合には、外国人（児童）という存在が「国際人としての意識」などの能力・資質を培うものとして考えられているのではないだろうか。

先ほどの因子分析では寛容性と相反するものとして現れた「拒否因子」について見ても、ほとんどの項目が、先ほどと正負が逆になって現れている。

⑸　寛容性を支えるもの―地域別

では、これらの特徴は、全ての地域で共通する特徴なのだろうか。次に、同様の分析を地域ごと

に見てみる。

結果的には、豊橋、浜松の両地域において、全体の場合と同じく「子どもに外国人の友達がいる」で最も高いベータ値となっていることがわかった（豊橋：0.197、浜松：0.170）。しかし、大泉においては最も高いベータ値を示すのが「ピアス認めるダミー」（0.207）となっており、「子どもに外国人の友達がいる」は２番目に高い数値となっている（0.170）。ベータの値自体は浜松のそれと同じであることを考えると、大泉においては、子どもという媒介項の存在も確かに重要なものとなってはいるのだが、「ピアス」という異文化の象徴に関する保護者自身の意識が、寛容性に関しては重要なものとなっている。

また、全体において現れていた「学歴」の二重性については、各地域で異なる特徴を見せている。

表8-13　全体の結果と地域別結果との比較

	全体	豊橋	浜松	大泉
親学歴	0.054	—	0.080	—
子どもに望む学歴	0.049	0.075	—	—
成功：個人の努力	0.042	0.085	—	—
塾の重要性	-0.059	—	-0.071	—
成功：学歴	-0.079	-0.061	-0.088	-0.124
不登校認めるダミー	-0.160	-0.157	-0.166	-0.130

豊橋においては、「親の学歴」と「塾の重要性」が現れない。ベータ値を見ると、正の影響力はより強く、負の影響力は弱くなっている。その意味で、豊橋は「（将来的な）成果」にウェイトが置かれるかたちで子ども（の学力・学歴）が媒介している。一方、浜松においては寛容性に正の影響を与える項目が少なく、負の影響を与える項目は同様の特徴となっている。負の影響力が強まっていることを考えると、こちらは豊橋とは逆に「（現在の）学力」にウェイトが置かれていると言えるだろう。大泉に関しては、負の項目だけが現れている。その意味では子ども（の学力・学歴）は、大泉に関してはそれほど強い媒介項とはなっていない、ということが言えるだろう。この結果については、最も強いベータ値を示す項目が、大泉のみ子どもではなく、異文化（の受容）となっていたことと重なるものである。

改めてまとめると、保護者における外国人に対する寛容性は、保護者自身の交流経験によって涵養されるというよりは、子どもに外国人の友人がいるかどうか、という点が地域を問わず非常に重要なものとなっていた。同時に、日本人児童と外国人児童との結節点として重要な場所が学校であるために、そこでは学校生活に関する意識もまた寛容性に関わっていた。厳密には学校生活から派生しているであろう、学歴や学力といったものについての意識がどうしても意識されてしまうという状況が見えた。ただし、そこには地域差が存在していた。

それでは、保護者の寛容性にとって重要な、外国人の友達とは、児童自身にとってどのような存在となっているのだろうか。ここからは児童についての分析に移る。

第７項　日本人児童についての分析

⑴　日本人児童の基本的属性

ここからは児童について見ていくこととしよう。ただし、児童用の調査票に関しては、設問内容などについて、保護者用のそれと全く同じものとはなっていないため、完全に保護者と同じ分析をすることはできない。また、こちらにおいても大泉町への調査は調査時期という点で隔たりがあり、

同時に、いくつかの設問が他二地域のそれと比べ異なっている点が存在している。とは言え、児童に関しても分析の主眼は、外国人（児童）との間にどのような関係性が築かれているのか、そして、それに関する彼らの意識がどのようになっているのか、という点について明らかにすることにある。

では、まず調査対象者となった児童の属性について触れておこう。各地域の人数と、学年は以下のようになっている。

表8-14　地域・学年構成

			地域			
			豊橋	浜松	大泉	合計
学年	小５・小６	度数	988	662	331	1981
		%	54.1	48.3	62.3	53.1
	中１・中２	度数	839	708	200	1747
		%	45.9	51.7	37.7	46.9
	合計	度数	1827	1370	531	3728
		%	100	100	100	100

⑵　交流経験・交流希望の状況

外国人児童との交流に関する設問はいくつかあるのだが、ここではそのうち、これまでの交流経験についての設問を使用していく。

交流経験、たとえば「外国語の文化を教えてもらう」に関しては、浜松・大泉で割合が高くなっている（浜松：20.0%、大泉21.7%、豊橋15.6%）。その他の項目においても、豊橋は全体的に交流経験が少ない状況にある。

一方、交流希望については、「外国語を教えてもらいたい」で豊橋の選択率が高くなっている（豊橋：45.2%、浜松：39.1%、大泉：42.7%）のだが、同時に、「あまり付き合いたくない」でも豊橋の選択率は高い（豊橋：18.2%、浜松：14.2%、大泉：9.6%）。とは言え、有意な差が現れる項目数に注目すると、交流希望については交流経験ほどの地域差は見られない[8)]。

⑶　外国人の友人数との関係

では、より具体的に、外国人の友達に対する意識はどのようなものとなっているのだろうか。保護者の分析においては、自らの子どもの影響（外国人の友達がいるかどうか）が、保護者の寛容性に影響を与えていた。では、保護者の寛容性を強く左右するものとしての、外国人の友達（の多少）とは、他の項目との間でどのような関係を示すものなのかを確認しておこう。

まず、実際の外国人児童との関係を、（外国人の）友人数という点から見てみよう。なお、以下では「外国人の友人が０人／少ない（１～２人）／多い（３人以上）」という分類を使用するが、これは全体の平均値2.8を境として分けたものである（ケース数はそれぞれ０人：378、少：2012、多：1716）。

各地域の構成比を見てみると、友人数、特に「０人グループ」については浜松で多く（22.3%）、豊橋と大泉で少ない（豊橋：2.8%、大泉：2.6%）という傾向にあるようだ。このように、友人数の多少については、交流経験・希望で現れた結果と重ね合わせるならば、関係の質的な側面（交流経験）と、量的な側面（友人数）とは必ずしも合致するものではないのかもしれない。

部活動を経験している集団における構成比については、友人数の「多いグループ」が多くなっている（44.4%）。また、スポーツ少年団、子ども会といった、家庭・学校（の授業）外の活動経験

については、いずれも友人数の「０人グループ」が少なくなっている（スポーツ少年団：7.4%、子ども会：5.7%）。結果の現れ方は異なるものの、活動範囲の広さが友人数の多さと関わっている、と言うことができるだろう。

次に、学校生活や友人について見てみよう。ここで注目するのは「日本人の友人数」「休み時間の友人数」「家に遊びに行く友人数」である。日本人の友人数については、回答を等サイズの３グループにおおまかに分けたものである（ケース数はそれぞれ１～10人：989、11～30人：1389、31人以上：1274）。

前二つは、おおまかに言えば（交流のある）友人数が多いことが、同時に、外国人の友人数も多くなるという関係にある。例えば「日本人の友人数」が「多い（31人以上）」グループにおける構成比では、外国人友人数の「多いグループ」が多くなっており（44.5%）、また、「休み時間の友人数」が５人以上のグループにおける構成比でも多くなっている（43.9%）。

「家に遊びに行く友人数」が５人未満である、０人、１人、２～４人という三つのグループにおける構成比では、外国人友人数の「０人グループ」が多い（０人：3.3%、１人：12.5%、２～４人：12.3%）。これらの結果を見るならば、友人数という点で見たときには、その絶対数が増えれば、外国人の友人数も増えるという意味で、ある種の「分け隔てなさ」が存在しているようにも見える。

交流経験については、やはり友人数が少なければその交流自体も行われていないという実態が見て取れる。例えば「外国語を教えてもらう」（5.1%）、「日本語教える」（5.8%）、「外国の文化教わる」（5.7%）、「勉強教える」（4.5%）などの経験があるグループでは、全て外国人友人数「０人グループ」が有意に少なくなっている。

経験したいことについても、友人数と関係している。外国人友人数が「０人グループ」は、ただ偶然に人数が少ないというだけではなく、当人の交流への姿勢における消極性が背景にある。もしくは、外国人友人数が少ない現状を変えるために交流の機会を持とうする姿勢はない、ということになるだろう。例えば、「外国語を教えてもらいたい」（7.0%）、「日本語を教えたい」（5.3%）、「外国の文化を教わりたい」（5.5%）、「日本文化を教えたい」（5.3%）、「勉強を教えたい」（4.2%）などを選択したグループでは全て外国人友人数が「０人グループ」の構成比が低い。また、逆に「あまり付き合いたくない」（15.2%）を選択したグループでは構成比が高くなっている。

外国人（児童）に関する言説に対する評価について見てみよう（全くそう思う、ややそう思うを統合して肯定回答とした）。やはり、外国人友人がいない者については、否定的な意識が存在しているようだ。例えば、「勉強が遅れる」（16.5%）であったり「外国人は外国人用の学校に行くべき」（12.1%）といった、排除の姿勢を示すような項目について肯定回答をしたグループでは「０人グループ」の構成比が低い。ただし、「友達がどこの国の人なのかなどまったく気にならない」に関しては、有意差が現れていない（p=0.790）。

⑷　外国人の友人についての地域別分析

それでは、最後に、これら項目について、地域ごとに見てみよう。

全体においては差が現れていた部活動、通塾などの活動経験に関しては、地域ごとに異なった結果が現れてはおらず、はっきりとした地域差は確認できない。

休み時間の友人数について。ここで注目したいのは浜松のデータである。浜松では、他二地域と比べ、休み時間の友人数と外国人友人数とが、比例関係になっているように見える（「休み時間の

友人なし」で「０人グループ」は52.9%、「休み時間の友人５人以上」で「多いグループ」は46.6%)。実際、地域別に両者の相関係数を出してみると、浜松においてのみ有意な正の相関を見せる(相関係数0.101、p<0.01。豊橋、大泉はいずれもp>0.1)。これがもつ意味について、少し考えてみたい。同様の関係は、「家に遊びに行く友人数」「放課後遊ぶ友人数」「日本人友人数」においても見られる。

いずれにおいても、浜松は（いくつかの場合における）友人の絶対数が、外国人友人数と正の関係を示しているように見える(相関係数はそれぞれ0.146、0.090、0.263、全てp<0.01)。逆に、豊橋と大泉においては、「日本人友人数」との間に弱いながらも負の関係が見える（相関係数は豊橋：−0.66、p<0.05、大泉−0.97、p<0.01)。

つまり、外国人の友達という存在は、日本人の友達とは全く異なるものではなく、日本人であれ外国人であれ、いずれも「友達」という範囲に含みこまれるようだ。浜松では、その傾向がより強く現れている。逆に、豊橋と大泉では特殊性をもったもの、日本人の友人とは異なるものとして「外国人の友達」を捉える傾向にあるようだ。だからこそ、外国人の友人が多いということは、日本人の友人の多さとは関係がない、もしくは、負の関係を示すということになる。

これは、豊橋と浜松の相違という点では地域差として考えられるが、大泉との相違という点では、時代効果も含まれていると考えられるだろう。

それでは次に、交流経験との関係を見てみよう。大泉においては交流経験が有意に関わっている項目が非常に少なく（「日本語教える」(p<0.05）と「日本文化教える」(p<0.01）のみ)、友人数と交流経験とはそれほど強い関係にはない。これは、大泉の調査時期が10年前であることを考えると、そこでの関係性の量と質とがまだ完全に合致しない、未分化な状態にあったのではないか、ということが推測される。

豊橋・浜松に目を向けてみると、いずれも、交流経験と友人数とが有意に関わる項目が多い（豊橋：5/7、浜松：7/7)。しかし、もう少し詳しく見ていくと、浜松においては交流経験が単純に友人数の多さと関わっているのだが、豊橋の場合、単純な多さではなく、むしろ、少人数であることと関わっている。例えば、「外国語を教えてもらう」については、豊橋は「少ないグループ」が多く（59.9%)、浜松は「多いグループ」が多い（57.0%)。同様の傾向は、両地域ともに有意差が現れた項目（「日本語を教える」「外国の文化を教わる」「勉強を教わる」「勉強を教える」）の全てで現れている。

つまり、浜松の場合には友人数の多さと交流経験は直線的な関係にあるのだが、豊橋の場合には、友人数が多ければ多いほど交流経験が増すというよりも、友人数がゼロではないが、多過ぎない、小集団である場合に交流が促進されることになるように見える。

では、交流希望についてはどうだろうか。

交流希望についても、交流経験と同じような結果が現れている。大泉では、「日本語を教えたい」、「日本の文化を教えたい」で多少関連が見られる（ともにp<0.05）程度で、全体としては、あまり関連が見られない。

豊橋・浜松では、先ほどと同じく、交流希望が友人数の単純な多さと関連する浜松と、小集団を志向する豊橋という相違が現れている。それがより端的に現れているのが「あまりつきあいたくない」という項目においてである。浜松は、「０人グループ」の構成比が高く（42.8%)、逆に豊橋に

おいては友人数の「多いグループ」（64.9%）の構成比が高い。言い換えれば、豊橋における外国人友人数についての意識は、何よりも「多過ぎないこと」に向かっていると言えるのではないだろうか。

それでは、最後に外国人（児童）に関する言説に対する評価について見てみよう。

ここでも、交流経験・希望と同様の特徴が現れている。

大泉は全ての項目で有意な関連を示さない。外国人児童に関する意識が、その友人数などの現状と直接は関連していないことが分かる。

浜松では、「勉強が遅れる」、「外国人学校に行くべき」という外国人児童に対する否定的な評価・意識については、友人数の「０人グループ」の構成比が高く（それぞれ32.9%、40.2%）、「興味が広がる」という肯定的な評価・意識については、友人数の「多いグループ」の構成比が高くなっている（50.0%）。浜松では、やはり外国人友人数と外国人への評価とが直線的な関係になっている。

豊橋では、浜松のそれとは少し異なった結果となっている。「興味が広がる」については、「少ないグループ」の構成比が高くなって（57.3%）おり、同時に、「外国人学校に行くべき」では、友人数が「多いグループ」の構成比が高くなって(53.3%)いる。肯定的な評価は小集団とセットになり、否定的な評価は集団の大きさとセットになっている。これは、ここまで見てきた結果と重なるものとなっている。

そして、最もその特徴を的確に現しているのが「友達がどこの国の人かは気にならない」についてである。豊橋においてこの問いに肯定的に回答したグループは、友人数が「少ないグループ」の構成比が有意に高く（56.4%）、友人数が「多いグループ」の構成比が有意に低く（41.7%）なっている。つまり、外国人の友人が少ない場合には、「どこの国の人であるか」、言い換えれば「外国人であること」はさほど気にならないのだが、外国人の友人が多い場合にはそれが気になってしまうということになるだろう。豊橋においてはやはり、数が「多すぎる」ことに注意がいくようになっているようだ。

ここまでの結果を一覧表にしたものが以下である。

表8-15　友人数と各項目との関係：地域別

	日本人の友人／外国人の友人	交流経験・交流希望	外国人についての評価
大泉	異なる存在	友人数と無関係	友人数と無関係
豊橋	異なる存在	小集団の場合に促進	友人数が多いと否定的評価／少ないと肯定的評価
浜松	同じ「友達」	友人数と直線的関係	友人数と肯定的評価が直線的関係

まず大泉に関しては、調査時期などの相違があるためか、他二地域とは異なる特徴を見せるものが多かった。とは言え、それは内容的な相違と言うよりは、いくつかの項目と友人数とがほとんど無関係であるという、形式的な相違と言えるだろう。

次に豊橋は、全体的には外国人の異質性を意識しているように見えるのだが、もう少し詳しく見ていくと、外国人友人数の多さと少なさとが、それぞれ異なった意味・効果をもっているということがわかる。外国人友人数が多いことは、必ずしも交流経験や肯定的な評価を支えるものではない。しかし、一方でそれは外国人友人数が少なければ少ないほど（＝０人であれば）良い、という関係でもなかった。そこでは、多過ぎないこと、小集団への志向が交流経験や肯定的な評価を支えるものとなっていた。

最後に浜松は、友人数と交流経験、そして肯定的な評価がそれぞれ直線的な関係として現れていた。友人数が関係しない大泉や、友人数の少なさが重要なものとなる豊橋と比べると、最も素朴な関係と言ってもいいだろう。しかし「⑶　外国人の友人数との関係」で見たように、浜松では外国人友人数「０人グループ」が他二地域と比べて非常に高かった。それはつまり、外国人の友人がおらず、交流がなく、肯定的な評価をもたない層と、外国人の友人がおり、交流があり、肯定的な評価をもつ層とに二極化している（していく）可能性があるということになるだろう。

⑸　公立小中学校という舞台

児童については、これらのような地域ごとの特徴が現れた。最後に、この調査対象となった児童たちの通う公立学校というものがどのような意味をもつのかについて、外国人児童と知り合う場所という観点から簡単に述べておきたい。

外国人の友人が一人でもいる児童が、その相手とどこで知り合ったかについての回答について見ると、やはり「学校」という舞台が重要なものとなっている。例えば、「同じクラス」（64.1％）、「部活動」（9.9％）、「その他の学校内」（11.8％）は、「近所」（5.1％）に比べても高い割合となっている。「同じクラス」「部活動」「その他の学校内」三つのいずれかを選択した者を「学校内全体」とすると、その選択率は69.8％となる。このように、学校という舞台は、外国人児童と知り合う場所、友達になる場所として、重要なものとなっていることが分かる。

ただし、そこには地域差もまた存在している。例えば、「学校内全体」について見れば、浜松では全体の91.5％が選択しているのだが、豊橋では57.7％と、大きな差がある。もちろん、そこには学校における外国人児童数などの要因が含まれている（外国籍児童割合は豊橋で7.4％、浜松で12.1％）だろう。先に見た浜松の特徴と組み合わせると、そこで起きている、もしくは今後起きうる二極化とは、外国人の友人と９割以上が学校内で出会う状況においては、外国人児童が在籍している学校に在籍しているか否か、ということが非常に重要になるということになるだろう。

また、結節点としての機能を比較した場合に、ここまで見てきた浜松と豊橋の特徴を考えると、単純に浜松の公立学校の方が結節点としての機能において豊橋よりも優れている、という結論を出すことは難しい。

確かに、全ての地域において公立学校が結節点としての役割を果たすことは間違いないのだが、その一方で、児童がもつ外国人との交流に対する姿勢、例えば豊橋のような小集団を志向するような姿勢が背後に存在しているために、ここで現れたような地域差が、必ずしも学校（の取り組み）には回収できない性質のものである、ということだ。逆に、浜松について言えば、公立小中学校は外国人児童と日本人児童の結節点として機能する（外国人の友人がおり、交流があり、肯定的な評価をもつ）一方で、両者の分断点として機能する（外国人の友人がおらず、交流がなく、肯定的な評価をもたない）場合があるかもしれない。とは言え、学校のあり方と、児童の意識・姿勢が具体的にどのような関係にあるかは今後の分析課題となるだろう。

いずれにせよ、ここから、公立小中学校が、日本人とブラジル人との交流における重要な結節点となっていることが分かる。

第８項　保護者に対する児童の影響

それでは、改めて保護者における外国人児童に対する寛容性は、これまで見てきた子どもの意識や行動から、どのような影響を受けているのだろうか。最後にそれを確認しておこう。

三地点での調査においては、基本的に保護者と児童の両方の回答を得ている。そこで、この二つのデータを統合することで、保護者の寛容性に対して、子どものデータにおいてはどのような項目が影響を与えているかについて分析を行った[9)]。

しかし、結果的には全体においても、地域別においても、児童の行動、意識それ自体が保護者の寛容性に直接的な影響を与えているとは言いがたい。回帰直線の当てはまりの良さを示す調整済みＲ二乗値について見ても、全体で0.025、豊橋で0.071、浜松で0.008、大泉で0.063となっている。確かに、全体の結果を見れば「興味が広がる」が正の影響（ベータ値：0.051）を、「外国人学校に行くべき」が負の影響（ベータ値：-0.073）を与えているように、児童の寛容的な態度が保護者のそれと重なっている部分はあるのだが、保護者の意識・経験を独立変数として行った重回帰分析の結果（表9-9）と比べても、その影響力自体も低いと言える。

そのように考えると、保護者の寛容性にとって重要な媒介項となる児童ではあるが、その媒介のあり方は、子どもの意識・行動それ自体ではなく、「子どもに外国人の友人がいる」という事実そのものを中心に媒介されている、と言うことができるだろう。

第９項　小括

児童を媒介とした、外国人（児童）への寛容性の促進や、それを背景とした交流の促進という線は確かに存在している。しかし、そこでの媒介のあり方は、純粋に児童の意識・行動を媒介するというよりは、例えば児童が外国人児童を家に連れてくるなど、「外国人児童の友人がいる」という事実が寛容性を支えるというかたちになっている。

しかし、外国人の友人という存在については、この三地域では少しずつ異なった志向を見せていた。具体的には、交流の経験や接触頻度が単純に友人数と比例するような関係にはない地域（豊橋・大泉）が存在していた。

10年前の、まだ外国人が完全には定着していなかったであろう大泉においては、彼らとの関わりにおける意識・行動などが、ある意味で未分化な状態にあったと推測される。もし、浜松と大泉の相違が地域差ではなく、時代効果であるとすれば、交流経験・接触頻度が友人数と正の関係を示す浜松は、10年前の大泉に比べ、（少なくとも児童のレベルにおいては）よりフラットな交流が実現されていると言えるだろう。

しかし、調査時期が１年しか開いていない豊橋と浜松との間には、時代効果だけでは説明できない相違が存在していることも確かであろう。もちろん、外国人を取り囲む時代状況は目まぐるしく変化しているために、１年間という時間の意味は決して小さなものではないだろう。とは言え、豊橋において現れていた、少人数であること、人数が多過ぎないことを志向する特徴は、日本人と外国人との関係におけるもう一つの姿を現しているように思われる。つまり、小集団というかたちにおいて、日本人と同じものとしての外国人ではなく、互いの相違点を認識しながらも（ある程度友好的な）関係性を築くための可能性が開けていると言えないだろうか。

第10項　まとめ――公立学校における関係と展望

以上をふまえ、最後に、公立小中学校におけるブラジル人と日本人の関係と展望を示したい。

まず、子どもの関係については、お互いの友人と知り合うもっとも重要な場が学校であり、公立学校がブラジル人と日本人の基本的な結節点となっていることが確認された。ブラジル人児童・生徒の視点から見ると、「好きな授業」ができるくらいの手厚い学習サポートや、役員経験など公立

学校文化への適応の程度の高さが、交流実態・交流希望を積極的なものとしていた。

地域差に着目すると、子どもの場合は、ブラジル人・日本人双方とも、おおむね大泉＜豊橋＜浜松の順に交流が積極的になっていた。これは、時間の経過と、ブラジル人児童生徒比率の高さにより、交流が促進されているものと捉えられる。そのようななか、豊橋の日本人児童・生徒は、小集団による選択的な交流を望んでいた様子が見られた。このように、公立学校を舞台にしながら、一様でなく、それぞれの地域に応じた交流のあり方を模索しながら、将来の共生の担い手が育ってきていると捉えられる。

一方、保護者の関係においては、ブラジル人と日本人とで明確な差異が見られた。日本人では、子どもの交流の質は関連を持たなかったが、子どもに外国人の友人がいるという事実が、外国人への寛容性を高める効果を持っていた。

それに対して、ブラジル人の場合は、子どもの交流そのものはそれほど大きな影響を与えていなかった。それらよりもむしろ注目されるのは、教育への関心と日本人とのつきあいの、それぞれの程度が高いほど交流意識が高くなっていたことである。滞日の長期化に伴い、豊橋や浜松では、特にブラジル人の保護者の教育への関心が強まっていた。そのことが、「子どものため」には日本人との交流が大切だという意識を醸成していた。しかし、それにとどまらず、ブラジル人保護者自身が日本人とのつきあいを深めてきたことで、日本人との交流のよさを知り、それを子どもにも勧めるという形で、人的要因が媒介となって交流がさらに活発化している状況が見出された。

地域差を見てみると、日本人では、おおむね豊橋＜浜松＜大泉の順に、文化的な面での寛容性が高く、交流が積極的になっていた。これは、外国人居住者比率の高さと相関している。つまり、特定の地区に外国人が集住しているのではなく、自治体全体の外国人比率が高い方が、それだけ交流の機会も増えることがうかがえる。一方、ブラジル人は、滞日の長期化に伴い、豊橋・浜松で、日本での教育、日本での生活に軸足を移し、交流を積極的にしていく様子が見受けられた。

以上見てきたように、ブラジル人の親子にとっては、公立学校は日本人との重要な結節点であった。また、学校現場での外国人教育支援の拡充や親自身の日本社会への根づきの強まりなどによって、豊橋・浜松など最近の調査結果からは、学校を介した交流がより積極的なものとなっている様子が看取された。一方、日本人親子にとっては、そのような単純な図式は見られない。豊橋の日本人児童・生徒は小集団での選択的関わりを望み、保護者においては豊橋・浜松の方が交流に消極的である。それは、外国人居住者比率の高さと関わりを持つことは見たとおりである。この現状から、より積極的な交流や共生を生み出すためにも、ブラジル人と日本人を結びつける公立学校の重要性はさらに増す。今後は、子どもや学校を介して、どれだけ親子両方の直接的な関わりの機会を増やせるかが、共生のあり方を大きく左右することになるだろう。

第２節　保育所における日本人と外国人

第１項　はじめに

前節では公立学校を中心としたブラジル人と日本人の交流について検討してきた。子どもにとって公立学校は、ブラジル人と日本人にとって基本的な結節点となっていること、保護者にとっても子どもほど明確ではないものの、学校あるいは保護者の教育意識という教育機関を契機として生じる交流の意識があることが確認された。

本節では引き続きブラジル人と日本人の交流について、場面を保育所に移して検討する。

保育所は労働目的で滞在する日系ブラジル人児童の家庭にとって、日中子どもを預かり保育してくれる施設という、児童福祉施設として利用される。しかし保育所は対象が乳幼児であるため、毎日の送迎を始めとして、公立学校以上に保護者が直接的に関わらなければならない場面が多い。そのため保育所では日常的にブラジル人と日本人保育士や日本人保護者との直接的な接触がある。ゆえに保育所は地域においてセグリゲート化しているブラジル人と日本人の交流を促進させる機関となりうることが指摘されている（品川 2003）。

また保育所に外国人児童や保護者がかかわることで、子どもたちが自然に言語を習得したり、バランスのよい世界観を経験することによって、異文化リテラシーを獲得できることも示唆されている（川村 2002）[10]。そのような子どもたちの経験は、ブラジル人、日本人双方の保護者にとっても影響をもたらすのではないだろうか。

そこで本節では、外国人が集住する「大泉町」「豊橋市」「浜松市」という３つの地域の認可保育所を対象にして、日本人である保育士や日本人保護者と、外国人児童や外国人保護者がどのような経験をし、どのような関係にあるのかを、全体的な傾向を確認しながら、地域比較という観点を含め明らかにしていこう。

第２項　地域の状況

ここでそれぞれの地域の状況を、年少人口と各地域における外国人児童に対する施策から見ていこう。大泉町の人口は42,373名でそのうち外国人は6,356名と総人口に占める外国人の割合は15.0%と高い比率となっている[11]。子どもについて見れば、小学校では児童数の合計が2,376名であり、その中で外国人児童数は230名と、全体の9.7%の割合となっている。一方保育園では園児数710名のうち外国人児童数は86名と全体の12.1%が外国人児童となっている。ちなみに幼稚園では５園870名の児童数のうち39名が外国人児童であり、その割合は4.5%と保育所の半数以下となっている（大泉町 2004）。大泉町の外国人児童に対する施策を次世代育成行動計画から見ると、「…地域性としては外国人比率が15%と高く、…中略…生活習慣や価値観の違いを考慮した上で、外国人の家庭に対しても健全な子育て環境への対策を計る必要がある」として、４つの主要課題の一つに「外国人対策」をあげている。さらに、基本目標の４つ目に「子どもと子育て家庭をみんなで応援するまち」として「外国人家庭を含めたすべての子育て家庭のため」と明示し、外国人家庭を意識した計画を策定しているものの具体的な施策や数値目標は確認されない。

次に豊橋市である。豊橋の人口総数は372,479名で、そのうち13,709名の外国人が住民登録をしている（法務省入国管理局 2008）。また豊橋市は愛知県の中でもブラジル人が最も多く住む都市である。愛知県内のブラジル人48,791名の中で豊橋に居住する者は8,666名と最も高く、その比率は愛知県全体の２割近くを占めている（17.8%）。年少人口を見ると、０～４歳の人口は18,640名となっており、人口総数の５%となっている。先の外国人の住民登録数から試算すれば685人程度の外国人児童が存在していることになる。そのような豊橋市の外国人児童に対する施策はどのようになっているのだろうか。まず基本目標の一つである「子育て家庭を支える環境づくり」の中で社会的支援を必要としている家庭の現状として「外国籍家庭の子どもに対しては、言語の違いによるコミュニケーション不足や情報不足などが懸念されることから、特に子どもを持つ家庭への母子相談などの適正な支援が必要」として、具体的な事業として、「外国人相談事業」「外国人母子保健相談」を行っ

ている。外国人相談事業では、ポルトガル語などによって日常生活での問題などの相談事業を行うものである。また、母子保健相談では、乳幼児の健康や育児に関する悩みに通訳を通して相談し、母親同士で話し合うものである。しかしその実績を見ると、平成14年にスタートしたがその年の参加数は10名、その翌年は１名の参加と利用数は多いとはいえない（豊橋市 2005）。

最後に浜松市である。浜松市の人口総数は、813,246名でありそのうち外国人登録者数は28,394名と比率としてはそう高くはないが、人口総数が多いため外国人登録者数の実数は全国で最も多い（法務省入国管理局 2008）。そのような浜松市の０～４歳の人口総数は38,436となっており、年齢区分の構成比としては4.8%となっている。浜松市における次世代育成支援行動計画を確認すると、外国人児童保育事業として、外国人児童が多く入園している園において、言語や生活習慣の違いから、意思の疎通に支障をきたしていることや、外国人児童が外国人専用の認可外保育所を利用していることを例にあげ、外国人児童を含めた待機児童の解消として具体的な目標値を定めている。平成16年現在、外国人児童は208名入所しているが、それを平成21年度までに76人増の284名にするとしている。また「外国人のための子育て教室・育児交流会」を重点事業としている。こちらも具体的な目標値を定めており、平成16年現在の実績は52組であるが、その後平成21年まで年間120組の外国人保護者の参加を目標としているなど、具体的な数値を定めるなどしている（浜松市 2006）。

このように外国人児童数や比率は市町村によって異なっているが、すべての市町村で外国人児童を意識した計画を策定している。しかしながら具体的な施策となると、豊橋や浜松では外国人を対象にした施策や数値目標が明確であるが、大泉では施策は講じているものの具体的な数値は示していないなど地域によって違いがみられる。

第３項　認可保育所の現状

本節では大泉町６園、豊橋３園、浜松４園の合計13園の保育士と保護者を対象としたアンケート調査の結果をもとに分析をすすめる（調査の概要ならびに対象園の概況については第４章を参照のこと）。はじめに各保育所における外国人児童の数を確認していこう。園児の総数は1,760名、そのうち外国人児童数は264名である。各園の比率を見ていくと、外国人児童数が、最も少ない園では3.8%、多い園では25.3%と幅がある。また園の規模も異なっているために、園児数が多い園では11.6%でも26名の外国人児童が入所している。一方で園児数が多く、比率も高い園（豊橋①）では56名の外国人園児が入所している。このように外国人児童の比率に関しては、同じ市町村内であっても均一ではないことがわかる。また外国人児童の国籍であるが、９割以上がブラジル人児童である。

さて、保育士たちが外国人保育に初めて関わった時期を確認してみよう。大泉町、豊橋市、浜松市の３つの地域を比較すると、大泉は13年前以上前であると答えた保育士が４分の１程度（26.4%）、７年～12年前と答えた保育士も同程度と（25.3%）、半数以上が７年以上の外国人保育の経験を持っている。豊橋は13年以上前であると答えた保育士は15%程度であり（15.4%）、７年～12年前と答えた保育士は２割程度（21.9%）、多くは６年以下の経験の保育士である（62.5%）。また浜松はさらに経験が浅い保育士が多く８割程度が６年以下の経験となっていた（80.3%）。

外国人保育の経験は保育士としての経験と比例するとも考えられるが、保育士経験を比較すると多少の違いはあるものの、外国人保育経験ほどの明確な違いは見られない。つまり外国人保育に対しての経験は、大泉が最も古く、次いで豊橋であり、浜松において外国人保育が見られるようになったのは比較的新しいと見ることができる。

表8-16　外国人保育の経験年数

	1～6年前程度		7～12年前程度		13年以上前	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
大泉	42	48.3%	22	25.3%	23	26.4%
豊橋	40	62.5%	14	21.9%	10	15.6%
浜松	53	80.3%	13	19.7%	0	0.0%

第4項　保育士をめぐる関係

⑴　保育士と外国人児童

外国人保育に関して、受け入れ側である保育士たちはどの様な意識を持っていたのだろうか。特にはじめて外国人児童と関わる時には、言葉や文化が違うことや、外国人保育の経験がないことを不安に思っている場合が多いようだ。そのため保育士たちは保育の場面で、「ジェスチャーを使って伝える」、「子どもにポルトガル語の単語を用いて言葉がけをする」などしている。特に子どもに注意を促すときや、ほめる時にポルトガル語を使うという。しかし園の状況や取組みはどの地域も同じように行われているのではない。保育士が初めて外国人に対応した際の不安や外国語を使う場面はどの地域も同じであるが、園児の国の言葉を使う比率を見ると、豊橋が他の都市と比較して高い。

その要因を考察してみよう。豊橋では初めて外国人園児が入所してきた時の園内の様子をみると、「別に変わりはなかった」と答えた比率が他の地域と比較して10ポイントほど低く、逆に「外国人園児の入退園が多く落ち着かなかった」と答えた比率は高いという結果であった。また園児の様子にも差が見られる。違いが見られる項目として、園児の使用言語がある。園児が使う言葉について、豊橋では「外国語」「外国語と少しの日本語」が他の地域と比較して多い。また外国人園児全体の様子にも違いが見られる。豊橋は外国人園児同志が集まることがあると答えた比率が6割以上と他の地域が3割程度であるのに対して高い。これらのことから、豊橋は外国人園児の入園で園全体の雰囲気も落ち着かず、言語の面や外国人園児への対応も必要となり、ポルトガル語での対応が必要にならざるを得ない状況だったと見ることができる。

このように保育士たちは外国人児童の状況に合わせて最善の工夫をしていると考えられる。その結果として外国人児童たちは「半年もすれば日常的に不自由はなくなる」というくらい、保育所の日本的な生活に慣れていくのである。つまり外国人児童からすれば、保育士は日本文化と母国の文化をつなぐ役割を果たしているといえよう。

表8-17　園全体の雰囲気

	大泉	豊橋	浜松
落ち着かなかった	17（18.3）	19（26.4）	10（1.37）
活気づいた	2（ 2.2）	4（ 5.6）	0（ 0.0）
外国人園児に手がかかる	29（31.2）	22（30.6）	28（38.4）
変わりはなかった	45（48.4）	27（37.5）	35（47.9）

表8-18　外国人児童の使用言語

	大泉	豊橋	浜松
外国語	1 （ 1.1）	1 （ 1.4）	2 （ 1.7）
外国語と少しの日本語	21（24.1）	30（43.5）	27（23.1）
日本語と少しの外国語	32（36.8）	31（44.9）	35（29.9）
日本語	33（37.9）	7（10.1）	53（45.3）

⑵　保育士と外国人保護者

保育士たちと外国人保護者の関係はどうであろうか。最初に保育士が外国人保護者をどのように見ているのか確認しよう。外国人保護者の教育意識について、「とても熱心」「まあ熱心」とする者は７～８割と全般的には教育熱心であると見ている。しかし、しつけに対しては「厳しい」「まあ厳しい」とする者は３割程度であり、日本人保護者が４割程度であることと比較すると、しつけに対しては日本人保護者よりも外国人保護者のほうが寛容であると見ているといえよう。だが、この結果を地域に着目すると多少違いが見られる。ブラジル人保護者が園児の教育に対して「とても熱心」であるという見方をする者は、大泉や豊橋では３割近い（26.7%、27.9%）のに対して、浜松では１割を超える程度である（12.7%）。また行事の参加についても「とてもよい」と見ている者は、大泉と浜松では１割を超える程度だが（14.1%、12.9%）、豊橋では３割を超える（35.4%）。これらの結果から、豊橋の保育士はブラジル人保護者のことを教育熱心であると見ている反面、浜松では熱心であると見ている保育士が少ないという見方ができる。

表8-19　ブラジル人の教育としつけ

	大泉	豊橋	浜松
とても熱心　（教育）	20（26.7）	17（27.9）	9（12.7）
とても厳しい（しつけ）	3 （ 3.6）	0 （ 0.0）	0 （ 0.0）
まあ熱心　（教育）	38（50.7）	33（54.1）	45（63.4）
多少厳しい　（しつけ）	25（29.8）	21（33.9）	23（31.9）
あまり熱心でない（教育）	17（22.7）	9（14.8）	16（22.5）
あまり厳しくない（しつけ）	46（54.8）	36（58.1）	39（54.2）
熱心ではない　（教育）	0 （ 0.0）	2 （ 3.3）	1 （ 1.4）
全く厳しくない　（しつけ）	10（11.9）	5 （ 8.1）	10（13.9）

このような外国人保護者の教育への関わりは、保護者自身の意識のあり方に加え、保育所の働きかけにも影響を受けるだろう。では保育士たちは外国人保護者に対してどのような取組みをしているのだろうか。

まず考えられるのは、園からの情報提供である。日本の文化をよく知らない外国人保護者にとって保育所の決まりや様子を知らせる配布物は重要な情報である。どの園も入園する際の決まりなどをまとめた「入園のしおり」をはじめとして、保育園の子どもたちの日常の様子や、保護者に対する協力要請などが「園便り」や「クラス便り」などで伝えられる。通常は日本語で書かれているが、園によっては外国人保護者が理解しやすいようにポルトガル語に翻訳したり、ローマ字でルビをふったりするなどの配慮をしている。配布物を翻訳しているかを尋ねたところ、６割～８割程度の者が「だいたい翻訳する」「時々翻訳する」と答えている。しかし詳細に見てみると「だいたい翻訳する」と答えたものは、大泉、浜松では１～２割であるが（23.9%、11.6%）、豊橋では５割程度が翻訳している（51.6%）[12)]。

表8-20　配布物の翻訳

	大泉	豊橋	浜松
だいたい翻訳する	21（23.9）	33（51.6）	8（11.6）
時々翻訳する	42（47.7）	22（34.4）	33（47.8）
ほとんどしていない	15（17.0）	8（12.5）	24（34.8）
全くしていない	10（11.4）	1（ 1.6）	4（ 5.8）

次に保育士たちの直接的なアドバイスがある。外国人保護者から相談を受ける割合を見ると、６割～７割の保育士が日本人外国人どちらからも相談を受けると答えている。ただし日本人からは相談を受けると答えた者が大泉、豊橋では１～２割であるが（15%、22%）浜松では３割ほど存在している(30%)。つまり浜松では３割の保育士が外国人保護者から相談を受けることは少ないと感じているということである。しかしそのことは、外国人保護者との関係が上手くいっていないことを表すものではない。なぜなら外国人保護者との関係は、８割程度が上手くいっていると評価しており、その比率に地域による違いはない。多くの保育士が外国人保護者とのコミュニケーションが良好であることを述べている。

さて、保育士の役割として、保護者同士の関係調整がある。保育所は学校教育と異なり、子どもが低年齢なため、保護者の送迎や園の行事などで保護者同士の直接的な交流の機会が多い。外国人保護者と日本人保護者の関係について「行事の際に話している」と見る保育士はそう多くはないものの、「会えば挨拶している」と答えた者は全体をみれば半数を超える。特に豊橋は67.1%と大泉や浜松と比較して10ポイント以上高い。また、「子どもを通じて話している」と答えた者も大泉15.5%、浜松12.2%に対して豊橋は24.3%と４分の１程度の保育士は日本人保護者と外国人保護者の関係を、挨拶よりも一歩進んだ関係であるとみている。

表8-21　日本人保護者と外国人保護者の交流

	大泉	豊橋	浜松
会えば挨拶している	63（54.3）	47（67.1）	49（54.4）
行事の時に挨拶している	19（16.4）	6（ 8.6）	13（14.4）
子どもを通じて話している	18（15.5）	17（24.3）	11（12.2）
話はしていない	16（13.8）	0（ 0.0）	17（18.9）

このように、保育士たちは外国人保護者に対して、保育所の生活を伝えることをはじめとして、日常的に相談を受けるなどの関係を持っている。また外国人保護者にすれば、保育士とのコミュニケーションに加え、日本人保護者との交流の機会でもある。そのことは、日本の生活に慣れない外国人保護者にとって、日本の文化や地域の状況を知る貴重な場となっていると考えられる。

上記のように保育士たちは、外国人児童や保護者に対して様々な配慮をしている。それは保育士の仕事として当然の配慮とも言えるが、そこには混成保育に対する好意的な見方が存在する。外国人児童の入園を「とてもよい」と見ている者は２割程度であるが、「どちらかといえばよい」を合わせると８割前後が混成保育に肯定的な見方をしている。しかしながらこの結果には地域的な違いが存在する。これについては次項以降に見ていこう。

第５項　外国人保護者と日本人保護者の関係

⑴　外国人保護者の状況

認可保育所を利用する外国人保護者たちは、日本人とどのような交流実態をもっているのであろうか。本項では、外国人保護者と日本人保護者がお互いをどのように見ているのか、また、どのような交流をしているのかを見ていく。保育所での交流を見る前に、まずは、保育所以外の生活の場において外国人と日本人がどのように交流しているのかを確認しておくことにしよう。

外国人保護者たちにとっての大きな生活の場である職場に日本人がいる者は、父親の94.9%、母親の84.2%に達する。ほとんどすべての外国人保護者が、職場において日常的に日本人と顔を合わせているといってよい。その点では、彼らは完全に日本人社会から孤立しているわけではない。また、外国人保護者側から交流の実態をみると、それなりに深い交流に至っていることがわかる。

日本人と一緒に食事をしたり、飲みに行ったりしたことがある外国人保護者は、父親の61.9%、母親の53.1%と半数以上いる。また、自宅に日本人を招いたことのある者も、父親で49.5%、母親で50.4%とほぼ半数である。一緒にレジャーを楽しんだことがある者も、父親の62.4%、母親の57.1%と多く、ただあいさつ程度だけではない付き合いを、外国人保護者と日本人がしていることがうかがえる。

一方、日本人保護者の側から見ると、外国人との日常における交流は余り活発ではない。同じ職場に外国人がいるという者は父親の23.9%、母親の19.4%に過ぎず、食事などをしたことがある者に至っては父親の14.5%、母親の11.7%しかいなかった。自宅に招いたことがある者、レジャーを楽しんだことがある者も１割程度であり、日本人保護者にとっては、外国人はまだまだ未知の存在であるといえるだろう。

⑵　外国人保護者の日本人観

保育所における外国人保護者の日本人保護者たちに対する視点から、両者の交流を見ていくことにする。

第４章でもみたように、外国人保護者たちは子どもに日本語や日本の文化が身につくことを期待し、認可保育所を利用している。その一方で、子どもたちをきっかけに自分自身も日本人保護者たちとのつながりをもちたいという気持ちをもっている。

このような外国人保護者たちの希望は、かなりの部分、実現しているといえる。まず、子ども同士のつながりをみてみると、80.7%の保護者が、子どもに日本人の友達がいると答えている。いないと答えたのは10.0%だけであり、子ども同士の交流については、保護者の思惑が実現しているといえる。

その一方で、保護者同士の交流は余り進んでいないのが実態である。子どもの友達の保護者と付き合いがあるかどうかを尋ねると、半数以上は「あいさつ程度」にとどまっている。「あまりない」または「まったくない」と答える保護者が父親の36.1%、母親の26.6%に達しており、母親の18.3%が「よくしゃべる」と答えてはいるものの、なかなか子どもを媒介にした交流は実現していない様である。保育所を利用し始めてから家庭にどのような変化が生じたのかを聞いても、「保育所を通じて日本人の親とつきあうようになった」と答えた者は父親の17.4%、母親の21.8%にとどまっている。

しかし、外国人保護者たちは日本人保護者と現状に満足しているわけではない。将来的に日本人

保護者と家の行き来ができるほど仲良くしたいと考える者が、父親の44.0%、母親の56.2%に達している。「あまり付き合いたくない」「つき合わなくていい」という者は父親で10.0%、母親では6.2%しかいないなど、今後の関係改善を強く望んでいるのである。

⑶　日本人保護者の外国人観

では、日本人との交流を強く望んでいる外国人保護者に対して、日本人保護者はどのような見方をしているのであろうか。次に、日本人保護者の意識を見ていこう。

日本人保護者の外国人に対する視線は、外国人一般に対するものと比較して好意的なものといえる。園に外国人園児が入ってくることに対しても、父親の80.6%、母親の81.9%が「賛成」または「やや賛成」と答えている。

日本人の、外国人園児・保護者に対するこのような視線の背景には、外国人の子どもたちと交流することで自分の子どもたちの国際的な視野が広がるという期待があり、父親の63.1%、母親の67.3%がそのように考えている。そのため、父親の65.8%、母親の68.4%が、自分の子どもには外国人の子どもと積極的に交流してほしいと考えている。

ただし、このような意識は、あくまでも外国人側が日本人のやり方に合わせてくれることを前提に成り立っているといえる。「外国人の子どもも、日本の保育所では日本語を使うべきだ」と考える者が父親の58.7%、母親の56.4%と半数を超える一方で「外国人の子どものためには、日本の保育所でも母国の文化を教育すべきである」と考える者は父親の26.2%、母親の27.7%に留まっている。

表8-22　次の意見についてどう思いますか

		国際的視野が広がる	積極的に交流してほしい	日本語を使用するのは当然	母国の文化を教育すべき
大泉町	父親	205（61.0）	228（69.5）	192（57.4）	95（28.5）
	母親	250（64.9）	272（72.5）	214（56.0）	108（28.4）
豊橋市	父親	172（59.7）	167（58.4）	178（62.3）	60（21.0）
	母親	240（67.3）	213（60.4）	206（57.8）	90（25.3）
浜松市	父親	112（74.2）	108（72.0）	82（54.6）	46（30.8）
	母親	158（71.8）	161（74.5）	120（54.6）	67（30.6）
合計	父親	489（63.1）	503（65.8）	452（58.7）	201（26.2）
	母親	648（67.3）	646（68.4）	540（56.4）	265（27.7）

注)「そう思う」＋「ややそう思う」の数字

子どもに外国人の友達がいると答えた者は、54.4%に達する。ただし、これには地域差が大きく、大泉町では61.7%が「外国人の友達がいる」と答えているのに対し、豊橋市では49.2%と半数を下回っている。また、豊橋市では「わからない」が34.9%に達している。

外国人保護者との付き合いは父母ともにあまりない。父親では「全然話さない」が42.5%と最も多く、父親に比べると送迎の際などに顔を合わせる機会の多い母親でさえ、「あいさつする程度」が64.9%である。では、今後はどうしたいと考えているのだろうか。

「あまりつき合いたくない」「つき合わなくていい」と答える者は、あわせても父親で9.3%、母親で4.0%と決して多くはない。ただし、「家の行き来ができるほど仲良くしたい」という積極的な交流を望むものもまた、父親で6.7%、母親で8.9%と多いとは言い難い。

しかし、その一方で、公立小中学校調査と同様、認可保育所においても子どもの交流が保護者の

外国人に対する交流意識を向上させるという結果も表れている。先ほどみた外国人保護者とのつきあいについては、子どもに外国人の友人がいる場合といない場合、わからない場合とでは、いる保護者の方が付き合いは深くなっている。また、保育所が外国人を受け入れることに肯定的な保護者も、子どもに外国人の友達がいない保護者の場合は36.5%、わからないという保護者の場合は38.6%であるのに対し、いる保護者の場合は54.4%と多くなっていた。

このように、日本人保護者の外国人保護者に対する交流意識は決して高いとはいえない。しかし、子ども同士の交流が、保護者の交流に対する意識を向上させており、実際の交流につながるケースも表れている。

表8-23　子どもに外国人の友人がいるか×外国人保護者とのつきあい（父母合算値）

		外国人の保護者とつきあいはありますか					
		家の行き来がある	必要なときだけ話す	あいさつする程度	ほとんど話さない	全然話さない	合計
外国人の友人	いる	23（2.4）	161（17.1）	504（53.4）	66（7.0）	190（20.1）	944（100.0）
	いない	0（0.0）	12（ 3.8）	172（55.0）	26（8.3）	103（32.9）	313（100.0）
	わからない	1（0.2）	32（ 6.8）	252（53.7）	44（9.4）	140（29.9）	469（100.0）
	合計	24（1.4）	205（11.9）	928（53.8）	136（7.9）	433（25.1）	1726（100.0）

表8-24　子どもに外国人の友人がいるか×外国人の受け入れについて（父母合算値）

		保育所が外国人を受け入れることについてどう思いますか					
		賛成	やや賛成	やや反対	反対	わからない	合計
外国人の友人	いる	266（28.1）	249（26.3）	336（35.5）	27（2.9）	69（ 7.3）	947（100.0）
	いない	64（20.5）	50（16.0）	122（39.1）	11（3.5）	65（20.8）	312（100.0）
	わからない	105（22.3）	77（16.3）	184（39.1）	20（4.2）	85（18.0）	471（100.0）
	合計	435（25.1）	376（21.7）	642（37.1）	58（3.4）	219（12.7）	1730（100.0）

第６項　保育士の意識の変化と規定要因

⑴　保育士の意識の変化

われわれは2001年９月にも、大泉町の保育所（E園）において保育士と保護者を対象とした調査を行っている。それから2005年の調査までの間にどのような変化があったのだろうか。本項と次項において、保育士の意識の変化と、日本人保護者の意識の変化を見てみたい[13)]。

大泉町にあるE園は、大泉町においても特にブラジル人の多いことで知られる地域にある私立の認可保育所である。園長の方針ではやくから外国人園児を積極的に受け入れており、2001年の調査時点では、園児84人のうち、27.4%にあたる23人が外国人園児であった。2005年調査では、比率こそ少し下がったものの、それでも100人の園児のうち23人が外国人園児であり、大泉町においては人数、比率ともに最も外国人園児の多い保育所となっている。

E園では、1990年代前半に外国人園児を受け入れるようになって以来、様々な保育の工夫をすることで外国人園児やその保護者と向き合ってきた。日本人保護者でさえ戸惑うことがあるという入園にあたっての準備・決まりなどを外国人保護者へわかりやすく伝えるためにポルトガル語版の『入園のしおり』を用意したり、毎月の行事などを伝える『園だより』も、卒園児の保護者の協力のもとポルトガル語に翻訳したりして、言葉の壁を少しでも取り除こうとしている。

また、実際に園児と接するうえでは、受け入れ当初からの様々な試行錯誤と葛藤を乗り越えて、

「『日本人』や『外国人』ということに関係なく、人との接し方を指導」（新藤 2003）していけばよいという結論に達している。また、日本の保育所に来る以上は日本にある程度住み続けることを前提としているはずであり、そのためには母国のものよりも日本文化や日本語を教えていった方がよいと考え、これまで保育士たちが行ってきた日本の保育スタイルをそのまま徹底することで、外国人園児を受け入れていった。

このように、様々な努力や実践、試行錯誤の結果、保育士たちは外国人園児の受け入れに意欲的に取り組んでいたのである。ところが、2005年に行った調査では少し様子が変っていた。外国人園児の受け入れに対して積極的な態度を見せた保育士（外国人園児受け入れを「とてもよい」「どちらかといえばよい」と答えた保育士）が21.4%と、全体の80.9%を大きく下回ったのである。E園の次に積極的な保育士が少なかった園は浜松市のM園であったが、それでも62.5%である。E園に何があったのだろうか。

⑵　E園の変化の要因

同じく大泉町にあるD園は、園の規模や外国人園児比率などがE園とよく似ている。このD園では、90.0%の保育士が外国人園児の受け入れに積極的な態度を見せている。品川・野崎・小内（2006）は、この２園の違いを「保育方針」「園を取り巻く環境の変化」「経験の蓄積」という３点から説明した。

「保育方針」とは、保育を行っていく上で母国の文化を教えることを重視するか、それとも日本社会に慣れることを重視するかである。先にみたように、E園は外国人園児を受け入れ始めてから、様々な試行錯誤の末、日本式のやり方の延長で外国人園児にも十分に対応できるという結論に至っていた。それに対しD園では、自身もブラジルに住んでいたことがあるという一人の保育士がブラジル人園児との意思疎通を目指してポルトガル語を学び始めたことをきっかけとして、園全体にポルトガル語やブラジル文化を学ぶ気運が高まっていったという。その後、E園の日本式保育実践が何らかの環境の変化によりほころびを生じ始めたのではないだろうか。

その「環境の変化」とは、園に対するサポート体制や外国人保護者にあると考えられる。E園は日本式の保育実践にこだわりを見せているとはいえ、外国人を全く無視しているわけではない。むしろ、他にさきがけてポルトガル語訳の『入園のしおり』『園だより』を作成するなど、手厚いケアをしてきた。しかし、公立園は町役場が、D園では保育士が、それぞれ配布物のポルトガル語訳に大きな役割を担っている中で、E園は卒園児の保護者のボランティアという形でこれらの作業をこなしていた。それが、2005年時点では卒園児保護者によるサポートがなくなり、もっぱら在園児の保護者の協力による体制へと変わってきている。つまり、外部からのサポートが弱まり、内部だけで翻訳作業をこなさなければならなくなってきているのである。これが、保育士たちの負担感を増すことにつながっていると考えられる。

また、E園は「経験の蓄積」という点でもD園に比べて不利な立場にある。E園は大泉町の保育所の中でも若い保育士が多く、またベテラン保育士が少ない。それにより、ベテラン保育士たちの経験が蓄積しづらく、常に手探りの状態で外国人園児たちに接していかなければならない状況を生み出していると考えられるのである。

⑶　保育士の意識の規定要因

これらの考察は、あくまでも大泉町のD園とE園との比較から導き出されたものである。そこで、

これらの知見をより拡大して確認するため、豊橋市と浜松市のデータも交えて保育士の態度を規定するものを考察していこう[14]。

まず外国人園児の受け入れに対する保育士の意識を確認すると、全体の80.9%が積極的な態度を見せていることがわかる。積極的な保育士が最も少ないのはE園の21.4%、２番目に少ないのは浜松市のM園で62.5%、次いで浜松市のL園の70.0%であった。

まず、保育方針が保育士の態度に与える影響をみてみよう。ここでは外国人園児に対する保育意識を聞いた４つの質問への回答傾向から、各保育所を「日本人志向型」保育実践を行う園と、「母国文化尊重型」保育実践の園とに分類した[15]。その結果、大泉町のB園、C園、E園と浜松市のL園、M園の５園が「日本人化志向型」の園、それ以外の８園が「母国文化尊重型」となった。この２つの区分で外国人園児の受け入れについて見た場合、「母国文化尊重型」の園では89.4%が外国人園児受け入れに積極的であるのに対し、「日本人化志向型」の園ではその割合が61.9%にまで下がっていた。このことから、日本的なやり方を外国人の子どもたちにも当てはめようとする保育実践は、外国人園児の受け入れに対する態度を消極的にしやすいということができるだろう。

表8-25　保育士の保育方針

		外国人園児比率	外国人園児の受け入れについて（とてもよい＋どちらかといえばよい）	外国人園児に母国語で話しかける（よくある＋時々ある）	外国人園児は母国語を覚える必要がある（とてもそう思う＋ややそう思う）	保育所では日本語を使うべき（とてもそう思う＋ややそう思う）	母国語を使うのは当然（とてもそう思う＋ややそう思う）
大泉町	A園	6.4%	88.2%	35.3%	61.1%	33.3%	38.9%
	B園	5.1%	76.9%	36.8%	38.9%	42.1%	11.1%
	C園	19.6%	90.0%	28.6%	28.6%	57.1%	0.0%
	D園	21.4%	90.0%	84.6%	58.3%	53.8%	50.0%
	E園	23.0%	21.4%	7.1%	21.4%	64.3%	42.9%
	F園	3.8%	100.0%	54.5%	45.5%	27.3%	45.5%
豊橋市	G園	25.3%	87.1%	66.7%	59.4%	48.5%	51.6%
	H園	18.2%	77.8%	88.9%	55.6%	66.7%	55.6%
	I園	11.6%	77.3%	60.0%	60.0%	60.0%	64.0%
浜松市	J園	17.3%	100.0%	45.8%	70.8%	39.1%	58.3%
	K園	15.5%	94.7%	47.7%	71.4%	42.9%	42.9%
	L園	24.5%	70.0%	10.0%	50.0%	50.0%	10.0%
	M園	5.6%	62.5%	23.5%	47.1%	47.1%	29.4%

注）表中網掛は、「日本人志向」を示すと考えられるもの。

表8-26　園の保育方針×外国人園児受け入れについて

保育所の分類	外国人園児を受け入れることについて		
	とてもよい＋どちらかといえばよい	余り望ましくない＋望ましくない	合計
日本人化志向型　B、C、E、L、M	39（61.9）	24（38.1）	63（100.0）
母国文化尊重型　A、D、F、G、H、I、J、K	127（89.4）	15（10.6）	142（100.0）
計	166（81.0）	39（19.0）	205（100.0）

$p<.001$（χ^2検定）

次に「経験の蓄積」についてみてみよう。本調査における保育士の平均年齢は35.1歳、保育士としての平均経験年数は11.3年である。平均年齢はF園が27.2歳と最も若く、次いでL園の29.6歳、H園の30.8歳、M園の31.3歳、E園の31.6歳となっている。逆に最も高齢なのはD園の44.0歳である。また、保育士経験年数はL園が4.4年と最も浅くなっており、逆にD園が16.9年と長くなっている。

ただし、保育士の年齢は正規分布しにくいことで知られている。保育士になって数年でいったん結婚、退職し、子育てを終えてからまた職場復帰する保育士が多いからである。そこで、キャリア５年以内の保育士と、20年以上の保育士の割合も調べてみた。F園とL園ではキャリア５年以内の「新人」の割合が半数を超えており、またE園とL園の２園はキャリア20年以上の「ベテラン」が一人もいなかった。

このようにみてみると、４つの指標全てにおいて園として平均より「若い」と出ているE園、L園、M園はいずれも、外国人園児の受け入れに対して相対的に消極的であることがわかる。また、F園は平均年齢、保育士の平均経験年数が最も若く、キャリア５年以内の若手も54.5%と多いにもかかわらず、キャリア20年以上のベテランも27.3%いることからか、外国人園児の受け入れに積極的な保育士が100.0%となっている。それ以外にも、受け入れに肯定的な保育士が９割を超える園は全てキャリア20年以上のベテラン保育士が平均以上となっており、保育士の若さ、経験のなさが受け入れに消極的な態度をつくるというよりは、ベテラン保育士の存在が積極的な態度を作るという側面が強いようである。

表8-27　保育士の経験

		外国人園児比率	外国人園児の受け入れについて	平均年齢	保育士経験年数	キャリア５年以内	キャリア20年以上
大泉町	A園	6.4%	88.2%	35.9歳	12.6年	16.7%	27.8%
	B園	5.1%	76.9%	33.4歳	11.5年	35.0%	20.0%
	C園	19.6%	90.0%	38.4歳	13.2年	35.7%	28.6%
	D園	21.4%	90.0%	44.0歳	16.9年	15.4%	46.2%
	E園	23.0%	21.4%	31.6歳	7.6年	42.9%	0.0%
	F園	3.8%	100.0%	27.2歳	6.7年	54.5%	27.3%
豊橋市	G園	25.3%	87.1%	34.8歳	11.5年	42.4%	24.2%
	H園	18.2%	77.8%	30.8歳	10.2年	33.3%	11.1%
	I園	11.6%	77.3%	33.4歳	12.6年	28.0%	24.0%
浜松市	J園	17.3%	100.0%	38.0歳	13.2年	33.3%	29.2%
	K園	15.5%	94.7%	40.8歳	12.5年	19.0%	23.8%
	L園	24.5%	70.0%	29.6歳	4.4年	60.0%	0.0%
	M園	5.6%	62.5%	31.3歳	7.7年	41.2%	11.8%

注）表中網掛は、平均を基準として「若さ」を示すもの。

ここまでの考察は各園を単位としたものであった。そこで、個人のレベルにおける態度決定要因を探るため、外国人園児受け入れに対する意識を従属変数とした重回帰分析を行った。関係が考えられる変数の中からステップワイズ法によって変数の選定をおこなったところ、表8-28の重回帰式が得られた。

最も説明力がある変数は「子どもたちの国際的な視野が広がる」であった。また、保育方針については「保育所では日本語を使うべき」が負の効果を示している。言語面での日本人化を要求する保育士は外国人園児の受け入れに消極的になりがちということがわかる。

一方、保育士の勤務する園の特徴として、「公立ダミー」（公立保育所に１、私立保育所に０を与えた）と「キャリア20年以上」（キャリア20年以上の保育士の百分率を変数とした）が正の説明力を持っている。これは、公立園では受け入れに肯定的な保育士が多く、また、キャリアの長いベテラン保育士が多くいる園ほど、受け入れに肯定的になることを示している。

表8-28　重回帰式

独立変数	非標準化係数	標準化係数	有意確率
（定数）	1.893	―	.000
混成保育について：子どもたちの国際的な視野が広がる	.242	.336	.000
公立ダミー	.251	.183	.007
キャリア20年以上	.181	.205	.003
混成保育について：保育所では日本語を使うべき	−.089	−.134	.039
調整済みR^2値			.250
重回帰式の分散分析の有意確率			p<.001

従属変数：外国人園児が入園することに対して

表8-28の結果から、２つの知見を導き出すことができる。第１に、働いている保育所の性格や構成などが外国人園児の受け入れに対する態度を規定するということである。これは、外国人園児受け入れの態度が、決して本人の素養だけに帰するものではないことを意味している。確かに、外国人園児の受け入れに、国際的な視野が広がるという積極的な意味づけができる者は受け入れ自体に積極的な態度をとることができるようになっている。また、外国人園児にも日本語を使わせようとし、あくまでも日本のやり方を貫こうとする保育士は、文化の違いを困難に感じやすく、結果として受け入れに消極的になってしまうこともあるだろう。しかし、これら保育士自身の保育観以外にも、保育所が公立であるか私立であるか、または、ベテラン保育士がどれだけいるかといった外在的な要因が外国人園児受け入れの態度に大きな影響を与えているのである。

第２に、重回帰式を作るに当たって排除された変数の問題である。外国人園児の人数や割合は、保育士の意識に余り影響を与えていない。われわれが仮説を構成するなかで、保育士の意識に影響を与えるものは外国人園児の「絶対数」か「相対比率」かという議論があった。外国人園児が大勢いる園では、たとえ園の規模が大きく園児比率が低かったとしても対応しなければならない頻度は増えるため、保育士の意識は大きく影響をうけるのではないかという仮説の一方で、逆に小規模園であっても、園児の比率が多ければその分外国人園児を意識する場面が必然的に増えるため、影響は大きくなるのではないかという仮説があった。しかし、実際は園児の絶対数も、比率も影響は与えていないのである。これは、実際の外国人園児と接触し様々な経験をしていく以上に、外国人園児の存在が園の保育に与える影響を保育士本人がどのように捉えているかが、最終的な態度決定には重要であることを示していると考えられる。

第７項　保護者の意識の変化

⑴　日本人保護者の意識変化

続いて、日本人保護者の意識がどのように変化したかも見ておこう。2001年の調査において、E園の保護者たちは地域の外国人に対してはあまり良い感情を抱いていないながらも、保育所で顔を合わせる外国人保護者に対しては比較的好感をもっていた。保育所に外国人園児が入所することについても、「賛成」「やや賛成」という者が７割近く（父親66.7%、母親69.1%）おり、また、子どもに対しても外国人園児と積極的に交流してほしいと考える者が半数を超えていた（父親54.6%、母親59.5%）。

それから４年後、E園の日本人保護者の外国人に対する感情は、保育士と異なりより一層好意的なものに変わっている。外国人園児の受け入れについては、父親の87.2%、母親の86.4%が「賛成」「やや賛成」と答えている。残りもほとんどは「わからない」であり、明確な反対の意思を示す保護者はほとんどいなかった。また、外国人園児を受け入れることについては、「子どもの国際的な

視野が広がる」というメリットを感じている保護者が2001年の時点では多かった（父親66.6%、母親76.1%）が、そのように考える者は父親57.4%、母親50.0%まで減っている。外国人園児の受け入れに賛成する心情は、それが自分の子どもにメリットをもたらすという利害だけで説明できるものではないようである。

では、なぜ日本人保護者の外国人園児受け入れに対する意識は向上しているのだろうか。それは、外国人との付き合いが多くなったことに由来すると考えられる。外国人保護者とのつきあいを聞くと、父母ともに2001年調査と比較して2005年調査は状況が好転しているのである。父親では2001年に36.4%いた「全然話さない」という者が2005年には18.0%まで減っている。その分増えたのは「あいさつする程度」であるため、決して交流が活発になったとはいえないかもしれない。しかし、関係が全く断たれていた状況に比べると、それでも好転といえるだろう。母親についても、「ほとんど話さない」＋「全然話さない」が19.0%から8.5%へ減少し、「必要な時だけ話す」が26.2%から33.9%に増えている。2005年調査において、外国人保護者との付き合いは外国人の受け入れに対してはっきりとした相関をみせていることから考えても、保護者の交流が意識をも良い方向に変えていくということがいえるだろう。

表8-29　日本人保護者の意識の変化（E園）

	父親		母親	
	2001年	2005年	2001年	2005年
外国人園児受け入れについて（賛成＋やや賛成）	66.7%	87.2%	69.1%	86.4%
外国人園児と積極的に交流してほしい（そう思う＋どちらかといえばそう思う）	54.6%	63.1%	59.5%	64.2%
子どもの国際的な視野が広がる（そう思う＋どちらかといえばそう思う）	66.6%	57.4%	76.1%	50.0%

表8-30　外国人保護者とのつきあいの変化（E園）

	父親		母親	
	2001年	2005年	2001年	2005年
家の行き来がある	0.0%	2.0%	2.4%	3.4%
必要な時だけ話す	12.1%	16.0%	26.2%	33.9%
あいさつする程度	39.4%	52.0%	52.4%	54.2%
ほとんど話さない	12.1%	12.0%	7.1%	1.7%
全然話さない	36.4%	18.0%	11.9%	6.8%

表8-31　外国人保護者とのつきあい×外国人園児受け入れについて（父母合算値）

	賛成	やや賛成	やや反対	反対	わからない	合計
家の行き来がある	20（83.3）	4（16.7）	0（0.0）	0（0.0）	0（ 0.0）	24（100.0）
必要な時だけ話す	147（71.7）	40（19.5）	7（3.4）	0（0.0）	11（ 5.4）	205（100.0）
あいさつする程度	522（56.7）	241（26.2）	34（3.7）	9（1.0）	114（12.4）	920（100.0）
ほとんど話さない	68（51.9）	40（30.5）	7（5.3）	0（0.0）	16（12.2）	131（100.0）
全然話さない	179（41.8）	127（29.7）	19（4.4）	15（3.5）	88（20.6）	428（100.0）
合計	936（54.8）	452（26.5）	67（3.9）	24（1.4）	229（13.4）	1707（100.0）

⑵　外国人保護者の意識変化

外国人保護者に関しても、徐々にではあるが2001年に比べて日本人保護者との距離は縮まっている。父親に関しては、2001年にはいなかった「ほとんど話さない」が7.7%（１人）に増えてはいるものの「必要な時だけ話す」という者は30.8%から38.5%に増えている。また、母親では「必要な時だけ話す」が33.3%から46.2%に増えたほか、「家の行き来がある」という者も１人ではあるが現れた。日本人保護者に比べると緩やかではあるものの、外国人保護者と日本人保護者の間の壁は少しずつ低くなっているようである。

E園の外国人保護者の意識の変化をみる上で、最も劇的に変わったのといえるのは、帰国志向であろう。「何があっても帰国する」という者は、2001年に父親で25.0%、母親で33.3%いたが、2005年には父母ともに０人となった。その一方で、2001年に１人ずつしかいなかった「とにかく日本に残りたい」という者が、2005年には父親で30.8%、母親で35.7%にまで増えているのである。また、どの小学校へ行かせたいかを聞いても、日本の小学校へ進学させたいという保護者が父親では62.5%から92.3%に、母親でも66.7%から85.7%へと増加している。日本のブラジル人学校へ通わせたいという保護者は父母ともに１人もいなかった。これまであった、根強い帰国願望と裏腹に定住化せざるをえないという外国人保護者像は崩れ始めているようである。これは第４章でもみたとおり、単に帰国願望の強い保護者は保育所ではなくブラジル人託児所へ行くようになったということであるかもしれない。

ただ、少なくとも保育所に子どもを預ける保護者の意識は、徹底した帰国志向から定住化を視野に入れたものへと変化している。それを反映してか、保育所に対して、「保育士がポルトガル語を身につけてほしい」と要望する保護者が、父親は27.8%から33.3%に、母親も44.4%から57.1%へと増えている。日本に定住化するにあたり、本格的に保育士と意思疎通を図っていこうという意識の表れであるといえよう。外国人保護者たちの意識が定住化志向へと変わっているならば、今後はよりいっそう日本人保護者や保育士との交流が、外国人保護者の社会生活においても重要になってくるといえるだろう。

表8-32　日本人保護者とのつきあいの変化（E園）

	父親		母親	
	2001年	2005年	2001年	2005年
家の行き来がある	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%
必要な時だけ話す	30.8%	38.5%	33.3%	46.2%
あいさつする程度	69.2%	53.8%	61.1%	30.8%
ほとんど話さない	0.0%	7.7%	5.6%	0.0%
全然話さない	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%

表8-33　日本人保護者の意識の変化（E園）

		父親		母親	
		2001年	2005年	2001年	2005年
何があってもとにかく帰国する		25.0%	0.0%	33.3%	0.0%
とにかく日本に残りたいと思っている		8.3%	30.8%	5.6%	35.7%
小学校通わせたい	日本の小学校	62.5%	92.3%	66.7%	85.7%
	日本のブラジル人学校	18.8%	0.0%	16.7%	0.0%
	ブラジルの小学校	18.8%	7.7%	16.7%	14.3%

第８項　小括

本節ではブラジル人が集住する市町の認可保育所を対象にして、ホスト住民である日本人とブラジル人の関係がどのような実態であるのか、それぞれの地域の実情を明らかにし、比較の視点を持ちながら検討をしてきた。

大泉、豊橋、浜松では市町の規模や外国人の比率が異なっている。しかしながらどの地域も外国人の子育てを意識した計画を策定していた。だがその内容を確認すると、外国人保護者に配慮した子育てとしながらも、具体的な施策や数値目標を掲げているところと、具体的な目標は提示していない町とに二分されていた。

保育の状況は市町で異なっている部分もあるが、外国人保育に対する経験を見ると、大泉、豊橋、浜松という順であり、それは市町自体の外国人保育に対する取組みの歴史とも言える。

保育士と日本人児童や保護者との関係を見ると、保育士は園の状況に合わせ様々な配慮をしながら、子どもと日本の文化や習慣を伝える役割を果たしていることが改めて確認された。また保護者にとっても、保育士は日本人との直接的な交流相手であり、さらには日本人保護者との接点を調整してくれる役割を果たしているといえよう。

実際に外国人保護者たちは日本人との交流を期待しており、日本人保護者も必要な時だけという条件をつけながらも、一般の日本人よりは外国人との交流を期待していた。それらのことからも、保育所が日本人と外国人との交流の契機となりうることが改めて確認された。さらに、どのような保育士が外国人園児受け入れを許容するのかという視点で見た場合、園の保育方針や保育士のキャリア、さらには園の環境が影響しており、外国人児童の受け入れには、保育士本人の意識や資質、保育士の努力の結果という単純な問題には還元されないという結果も明らかになった。

以上の結果から、日系ブラジル人をはじめとする外国人保護者にとって保育所は、日本人との直接的な交流の場であること、特に保育士の果たす役割が大きいことが改めて確認されたとともに、保育士の外国人受け入れの許容性は様々な要因によって規定されていることが明らかになった。

第３節　おわりに

以上、公立小中学校や認可保育所における日系ブラジル人の子どもたちの実態について、おもに日本人との交流に着目してみてきた。

公立小中学校と認可保育所双方に共通する点として、第一にこれらの学校、施設が日系ブラジル人と日本人との交流の場となっていること、さらに、子どもたちの交流の活発化を通じて、将来の共生の担い手が育成されているであろうことが挙げられる。

公立小中学校では、日本人保護者において子どもに外国人の友人がいると、保護者の交流も促進されるという傾向が見られた。また認可保育所においても、日本人保護者の外国人保護者に対する交流意識は一般市民の水準よりも高くなっている。日本人側からすると日常生活において外国人と接する機会が少ないなかで、学校や保育所によって顔を合わせる機会が提供されることは、両者の交流に大きな影響を与えていることがわかる。

また、公立小中学校においては、交流に対する態度に地域差が生じていた。子どもの場合は、自治体が外国人を受け入れてからの時間の経過や外国人児童の比率に比例する形で、保護者の場合は自治体全体の外国人比率に比例する形で、交流に対してより積極的な態度が培われている。一方、

このような地域による傾向の差は、認可保育所調査ではあまりみられなかった。これは、まだ子どもたちが小さく、子ども同士の交友関係が保護者同士の交友へと結びつきにくいという事情が考えられる。

ただし、認可保育所の場合は、子どもと保護者双方と接する保育士の意識に興味深い違いが生じていた。それは地域の差というよりはむしろ園をめぐる環境の違いによるものであり、園全体の保育士たちのキャリアや、園として外国人園児に接するための保育方針などによって、保育士の外国人園児に対する態度が影響を受けることがわかった。これは、公立小中学校などを今後見ていく上でも、保育士や教師のモチベーションを規定しうるものとして注目できるだろう。

ところで、認可保育所や公立小中学校が将来の共生の担い手を育成している可能性がある一方で、それはまた一つの問題点を投げかけている。

第４章でみたように、ブラジル人学校へ子どもを通わせているブラジル人保護者は、日本人との積極的な交流を望みつつも、実際には自らの帰国願望を確認するための「アンカー」としてブラジル人学校を利用していた。また、認可保育所とブラジル人託児所をそれぞれ利用している保護者の比較では、日本での生活が長期化することをある程度視野に入れて卒園後は子どもを日本の公立学校へ上げたいと思っている認可保育所の保護者と、帰国の意思をはっきりと持ち、小中学校はブラジル人学校かブラジル本国の小中学校へ行かせたいという託児所の保護者という対比が明らかになっている。

これらの結果と本章における知見を合わせると、公立小中学校や認可保育所が将来の共生の担い手を育成すればするほど、ブラジル人託児所→ブラジル人学校というコースをたどるブラジル人との隔たりを大きくしていく可能性が指摘できるのである。

これまで、ブラジル人集住地域において日本人とブラジル人の生活空間が隔離される「セグリゲート化」が問題とされてきた。認可保育所や公立小中学校は、子ども間でも、また保護者間においても、このセグリゲート化を食い止める可能性を秘めているといえる。ただその一方で、今度はブラジル人社会内におけるセグリゲート化を引き起こし、ブラジル人学校ルートをたどるブラジル人が日本人社会と日系ブラジル人社会の双方から隔離される危険性をはらんでいるのである。

注

1）「バイリンガル先生活躍　太田の小中学校」『朝日新聞（群馬版）』2008年７月17日付朝刊。

2）「浜松市多言語生活情報『カナル・ハママツ』（浜松市ホームページ）」（http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamaJa/09_kyouiku_03_01.htm，2009.2.11）。

3）2007年９月に浜松市の公立中学校で行った聞き取り調査より。

4）2006年９月に豊橋市の公立中学校で行った聞き取り調査より。

5）ここでは「教わる」に関わるものとして「日本語を教わる」「日本文化を教わる」「学校の規則を教わる」「勉強を教わる」を、「教える」に関わるものとして「ポルトガル語を教える」「ブラジル文化を教える」「勉強を教える」を掲げた。また、「意志不明」には、「教える」または「教わる」のうち一つを選んでいるのだが、「つきあいたくない」も選んでいる者を分類した。

6）「いじめ」経験については、調査上の配慮から直接質問することができなかった。そこで、「学校での悩み」として「日本人のこと」を挙げていた者と、「学校での一番の悩み」（自由回答）と

して「いじめ」「差別」「けんか」などを挙げていた者をあわせて「いじめ」経験者と捉える。

7）以下、特に断りがなければ、多い／少ないという表現は、全てカイ二乗検定の結果が$p<0.01$であり、調整済み残差が相対的に高い／低いということを示す。

8）$p<0.01$となった項目数は、交流経験で7/7、交流希望で2/8となっている。

9）保護者と児童とのデータが共に揃っているものだけを分析対象とするため、全体の母数が保護者・児童の分析におけるそれと異なっている。しかし、統合データにおいても保護者の因子分析の結果は大きく変わるものではなかったため、寛容因子・拒否因子については保護者だけのデータの場合と同じ名称をつけている。

10）川村（2002）が対象とした保育園の環境は、外国人児童といっても一定の国に偏るのではなく、韓国、中国、台湾などのアジア系をはじめとして、アメリカ、フランス、イギリス、パキスタンなど20カ国近くの外国人児童が入所しており、本稿で扱う外国人＝ブラジル人という図式とは多少異なる。だが国籍やエスニシティを意識することなく、経験した文化を自然に取り入れる乳幼児が、保育所の生活で日本人やブラジル人とふれあうことで得られることには共通性があると考える。

11）大泉町の数値は調査時前年の2004年のデータを用いている。

12）配布物の翻訳は公立の保育所では市町村の担当部署が行うことが多く、私立保育所の場合には保育士や外国人保護者、さらには卒園した外国人保護者がボランティアで行っている。

13）2001年の調査については、保育士調査は新藤（2003）を、保護者調査は品川（2003）を参照のこと。

14）詳細は野崎・品川（2009）を参照のこと。

15）分類の仕方は以下のとおりである。保育において母国文化を尊重すべきか、日本文化に順応すべきかをきいた「外国人園児に母国語で話しかけることがありますか」「外国人園児は母国語を覚える必要がある」「保育所では日本語を使うべき」「母国語を使うのは当然」という４つの質問に関して、まず母国文化の尊重を志向する３つの質問（「外国人園児に母国語で話しかけることがありますか」「外国人園児は母国語を覚える必要がある」「母国語を使うのは当然」）に肯定的な保育士が半数以下の場合と、「日本語を使うべき」に肯定的な保育士が半数以上いる場合を「日本人化志向がある」と判断する。そして、園ごとに「日本人化志向がある」項目の数をカウントし、３問以上の場合、その園は「日本人化志向型」であると判断し、２問以下の場合は「母国文化尊重型」であると判断した。

参考文献

浜松市，2006，『次世代育成支援行動計画』浜松市．

法務省入国管理局，2008，「平成19年における外国人入国者数及び日本人出国者数について（確定版）」（http://www.moj.go.jp/PRESS/080331-1.pdf，2008.3.31）．

外国人集住都市会議，2006，「よつかいち宣言―未来を担う子どもたちのために―」（http://homepage2.nifty.com/shujutoshi/shiryou/shiryou/20061121yokkaichi.pdf，2009.1.31）．

川村千鶴子，2002，「人との「異なり」とは何かー多文化教育を拓くもの」渡戸一郎・川村千鶴子編著，『多文化教育を拓く』明石書店，52-6．

児島明，2006，『ニューカマーの子どもと学校文化』勁草書房.
野崎剛毅・品川ひろみ，2009，「日系ブラジル人保育の課題」『國學院短期大学紀要』26.
大泉町，2001，『大泉町健やかにみんなの輪で育む大泉町』大泉町.
小内透，2003a，「日本人の親子から見た外国人の子ども」小内透編著『在日ブラジル人の教育と保育』明石書店，45-61.
————，2003b，「在日ブラジル人の教育・保育の現状と課題」小内透編著『在日ブラジル人の教育と保育』明石書店，216-28.
————，2008，「わが国における外国人の教育問題の歴史と現状」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書25　外国人集住地域における日系ブラジル人の教育と保育』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，1-13.
小内透・酒井恵真編著，2001，『日系ブラジル人の定住化と地域社会』御茶の水書房.
太田晴雄，2000，『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
佐久間孝正，2006，『外国人の子どもの不就学――異文化に開かれた教育とは』勁草書房.
清水睦美，2006，『ニューカマーの子どもたち』勁草書房.
品川ひろみ，2003，「認可保育所に子どもを預ける親の意識」小内透編『在日ブラジル人の教育と保育』明石書店，183-200.
品川ひろみ・野崎剛毅・小内透，2006「日系ブラジル人保育の現状と課題」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』58号，177-180.
新藤慶，2003，「認可保育所の実態と保育士の意識」小内透編『在日ブラジル人の教育と保育』明石書店，167-182.
————，2008，「外国人の親子から見た公立学校における交流の実態と意識」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書25　外国人集住地域における日系ブラジル人の教育と保育』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，26-69.
竹ノ下弘久，2005，「『不登校』『不就学』をめぐる意味世界」宮島喬・太田晴雄編著『外国人の子どもと日本の教育』東京大学出版会，119-138.
恒吉僚子，1996，「多文化共存時代の日本の学校文化」堀尾輝久・久富善之ほか編『講座学校第６巻　学校文化という磁場』柏書房，215-40.
豊橋市，2005，『豊橋市次世代育成支援行動計画　子育て応援プラン』豊橋市.

（第１節第１～５・10項：新藤慶、第６～９項：菅原健太、第２節第１～４項・７項：品川ひろみ、第５・６項：野崎剛毅、第３節：新藤・菅原・品川・野崎）